



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 各教科領域別研究内容(研究年報)(fulltext) |
| Author(s) | 東京学芸大学附属学校研究会 |
| Citation | 東京学芸大学附属学校研究紀要, 37: 169-210 |
| Issue Date | 2010-06 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/107485 |
| Publisher | |
| Rights | |

目 次

【I】 各教科領域別研究内容

| | |
|---------------|-----|
| I 国 語 科 | 171 |
| II 社 会 科 | 174 |
| III 算数・数学科 | 177 |
| IV 理 科 | 180 |
| V 音 楽 科 | 184 |
| VI 図画工作・美術 | 186 |
| VII 体育・保健体育科 | 188 |
| VIII 技術・家庭科 | 193 |
| IX 英 語 科 | 196 |
| X 道 徳 | 197 |
| XI 学 校 保 健 | 200 |
| XII 幼 児 教 育 | 201 |
| XIII 学 習 評 価 | 202 |
| XIV 書 写 ・ 書 道 | 204 |
| XV 教育と福祉 | 205 |
| XVI 生活・総合 | 207 |
| XVII 情 報 教 育 | 209 |

【II】 各附属学校・園の研究内容

| | |
|-----------------------|-----|
| 世田谷小学校 | 211 |
| 小金井小学校 | 212 |
| 大泉小学校 | 213 |
| 竹早小学校 | 214 |
| 世田谷中学校 | 215 |
| 小金井中学校 | 216 |
| 竹早中学校 | 217 |
| 高等学校 | 218 |
| 国際中等教育学校 ・高等学校大泉校舎 | 219 |
| 国際中等教育学校 | 220 |
| 特別支援学校 | 221 |
| 幼稚園（小金井園舎） | 222 |
| 幼稚園（竹早園舎） | 223 |
| 附 記 | |
| 附属学校研究員一覧 | 224 |

【I】 各教科領域別研究内容

I. 国 語 科

1. 国語部全体の研究主題

「国語科の新しい授業づくりの視点」

1. 1. 研究の経過

4月22日（水）地区会① 5月27日（水）国語部全体会（大泉小学校） 6月24日（水）全体会
9月16日（水）地区会② 10月28日（水）全体会／シンポジウム（大学）
11月18日（水）地区会③ 1月27日（水）地区会④ 2月24日（水）全体会（国際中等教育学校）

2. 各地区の研究

2. 1. 世田谷地区の研究概要

2. 1. 1. 研究主題

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究 ～国語力向上と教師の授業づくりとの関連～

2. 1. 2. 研究のねらい

附属合同研究会研究プロジェクトの第三年次である。1年次・2年次の研究と実践の積み重ねから、国語科の教科構造を明確にし、授業づくりやカリキュラム開発に生かせるようにする。教師の授業づくりの力の向上を図ることで教員養成カリキュラムとの関連を図る。また、この取り組みは世田谷地区だけでなく、他地区や大学、外部の先生方との共同研究である。

2. 1. 3. 研究の内容と成果

A 目的論的な追究のグループ：各グループの研究をもとに、「国語力イメージ図」を各学年段階に応じた形で具体化した。これにより、それぞれの実践と国語力との関連・働きかけが明確になり、事例の検証や応用という点で効果が見られた。

B 内容論的な追究（古典・文学・言語etc…）のグループ

B-1【古典】：2年次までの取り組みをもとに、古典学習における実態と問題点を踏まえた実践から、古典学習の取り組みにおける国語力向上を目指した古文と漢文で関連した授業作りの展望を見いだすことができた。

B-2【文学】：2年次までの研究をもとに、価値ある〈抵抗〉感のある教材を読むことを通じて、どのような力をつけるのかということについて実践を積み重ね、検証した。児童・生徒がどのような力を乗り越えていくのか。読解力の育成と共に、国語力向上や授業作りとの関連を図ることができた。

B-3【言語生活・言語体系】：昨年度および一昨年度に見いだした観点についての検討を行い、実践を重ねた。これまでの実践から課題として見いだした事柄について検証し、国語力との関連を見出した。

C方法論的な追究【小・中・高の関連・情報活用能力と国語力】：読書活動・情報活用という視点から、図書館との連携や図書資料の活用などを意識した単元作り・授業実践を行った。情報活用ということについて、「学校図書館を」使いこなす」という視点からの連携という、具体化した形での研究を行った。

2. 1. 4. 今後の課題

これまでに培った基礎的な事柄から、国語力向上に関わる授業作りの視点や授業力について、より具体的案方策や、実践を重ね、その応用性を見いだし発信していくことが今後の課題と考えられる。

（文責 渡邊 裕）

2. 2. 竹早地区の研究概要

2. 2. 1. 研究主題

豊かな伝え合いをめざして—「話すこと・聞くこと」の小中連携カリキュラムづくり—

2. 2. 2. 研究のねらい

国語科の小中連携カリキュラム作りに着手している。今年度は、昨年度に続き、「話すこと・聞くこと」の小中連携カリキュラム作りに取り組んだ。

2. 2. 3. 研究の内容と成果

(1) 実践授業

- ① 6月10日(水) 小学6年生「仮面—教材『素顔同盟』」授業者 浅見優子教諭
協力研究者 多田孝志先生(目白大学教授)
- ② 7月10日(金) 中学3年生「価値ある質問」を考えさせるスピーチ 授業者 石井健介教諭
- ③ 10月23日(金) 小学6年生「男女共同参画白書を作ろう」(事前授業) 授業者 浅見優子教諭
協力研究者 多田孝志先生(目白大学教授)
- ④ 研究発表会11月14日(土) 小学6年生「2009年度男女共同参画白書を作ろう」 授業者 浅見優子教諭
中学2年生「自由研究作品を発表する」鈴木健一教諭 協力研究者 多田孝志先生(目白大学教授)

(2) 成果

- ① 話す・聞く活動を通して、「つきたい力」はどのようなものか、話す・聞く活動には、どのような「活動と形態」があるか、話す・聞く活動で、「つく力」は、どのようなものか、ということ明らかにし、小中を通じた子どもの学びを見通すことができた。
- ② 小中の国語科では、学習領域や学習活動が重なり合い、同じような取り組みを行うことが多いが、各自の授業計画から授業後まで小中教員で見合い、連携して研究することが盛んになった。
- ③ 話す・聞くに関する小中連携カリキュラムがまとまった。

2. 2. 4. 今後の課題

- ① 第1ステージの子どもの学びと育ちを、どのように小中連携カリキュラムに位置づけていくのか。
- ② 今後は「書くこと」「読むこと」に関する小中連携カリキュラム作りを引き続いて行う。(文責 浅見優子)

2. 3. 大泉地区の研究概要

2. 3. 1. 研究主題

学校ごとの課題に応じたカリキュラムの作成と実践

2. 3. 2. 研究のねらい

大泉地区の各学校の特色を踏まえた上で、学校相互の関連を図ったカリキュラムの作成を目指す。

2. 3. 3. 研究の内容と成果

言語活動・伝統的な言語文化・コミュニケーション力の3つのグループに分かれ、研究を進めた。

【伝統的な言語文化】小中高の新学習指導要領と使用している教科書の教材を検討した。小学校では来年からの新教科書で古典教材が多く採用されると言われている。そこで、大泉地区にある附属学校として、多くの児童・生徒が12年間同じキャンパスで過ごすことになるので、小中高を見据えた古典のカリキュラムを考えていくことも必要である。今年度はカリキュラム作りのための古典の分類を検討し、仮に「短歌」「俳句」「ことわざ・慣用句」「故事成語」「随筆(古文)」「物語(古文)」「日記(古文)」「説話(古文)」「伝承(能・狂言・民話・落語・民謡など)(古文)」「漢詩(漢文)」「史伝(漢文)」「文章(漢文)」「思想(漢文)」の13項目とした。

(文責 工藤哲夫)

【コミュニケーション力】話を伝える力と話を引き出す力を伸ばすことを目的とした学習として、スピーチやインタビューなどの活動の充実が図られるべきではないかと考えられた。話す側の力を育てるためには、学年に応じて体系的・継続的にスピーチや報告の仕方を学習していく必要があり、聞く側の力を育てるためには、質問の質について考え、それを活用する活動が必要であろうと思われる。また、よい聞き手になるためには、話を聞き出そうとする姿勢や相手の話に耳を傾ける姿勢を養う機会を、授業内外を通じて設定していくことが望まれ、その中で学習したことを次に生かせるような工夫をすることが必要である。（文責 杉本紀子）

【言語活動】「書くこと」の分野に焦点を当てた。原稿用紙の使い方に始まり、書く文種に応じた構成の仕方、表現技巧の生かし方など、小中高で一貫した学習の積み重ねがあることが望ましい。そのために、各学校種の学習指導要領を理解し、具体的な事例を持ち寄ることで理解を深めようと考えた。今年度は、評価と添削指導を、小中高それぞれがどのように行っているかということについて、作品と添削例を持ち寄り、相互理解を図った。

来年度も、これら3つの分野について引き続き研究を進めていく予定である。

（文責 石川直美）

2. 4. 小金井地区の研究概要

2. 4. 1. 研究主題

活用につながる「読むこと」の授業

2. 4. 2. 研究のねらい

小金井地区では昨年度「確かな受容から始まる説明文の読み」というテーマを掲げ、読みの観点を「情報」「構成」「表現」「筆者」に分けて評価しながら読むことを目指して研究を深めたことで、児童が言葉や叙述にこだわりながら読みの根拠を明らかにして伝え合うことができるようになってきた。一方課題としては、指導のねらいと学習意欲の兼ね合いを考えた単元の構想を深める必要があることも明らかになってきた。そこで「『読むこと』の学習を生かす」ことをつまり、「活用」することを単元の構想段階においてより重視し、学びの必要感を児童にもてるようにしたいと考えた。

2. 4. 3. 研究の内容

「活用」につながる「読むこと」の学習を顕在化するために、「何を」「どのように」活用するかという2つの側面に着目し、その要素を以下のように3つに分けて考えた。

| |
|--|
| 「何を」活用するのか・・・「学習内容を」「学習した能力を」「学習した方法を」活用する 「どのように」活用するのか・・・「国語科内で」「他教科で」「日常生活で」活用する |
|--|

この2つの側面と3つの要素から「読むこと」の学習をとらえることで、児童が目指す学びの姿をイメージしながら目的をもって自ら学ぶことができるとともに、教師も単元のどの段階で、何を活用するのかという単元の構想をより具体的にを行うことができる。つまり教師の側からの「指導」と子どもの側からの「学び」の実感との関係を一体化させるような単元の構想を求めるために、「活用」という概念をとらえようと考えて実践を重ねた。

2. 4. 4. 成果と課題

「学び」の実感という面では、単元の構想において「活用」を意識することで子どもたちが学習意欲を継続し、向上させることが認められた。しかし、他教科や日常生活の場面で活用することについては実践が少なく、さらに積み重ねていくことで検証していく必要がある。

（文責 川端秀成）

Ⅱ. 社 会 科

1. 世田谷地区 研究報告

1. 1. 研究テーマ 「領域別学習における小中高社会科カリキュラムの研究」

1. 2. 研究テーマについて

2007年度より世田谷地区では「共生」をキーワードとして、各学校段階での学習内容や生徒の実態をもとにした共通カリキュラムの作成と共通教材の開発を検討してきた。昨年度はその作成と開発にあたって、「共生」に関わる「人権」「国際理解」「環境」「平和」「地域」の5つのモデル領域を設定して、共通カリキュラムの作成と共通教材の開発の可能性を検討してきた。今年度はその5つのモデル領域における共通カリキュラムの作成と共通教材の開発の実現化を図るために、各学校でのカリキュラムや実践事例を持ち寄り検討を行うことにした。

1. 3. 研究の経過

| | | | |
|-----|-----------|----------|-------------------------|
| 第1回 | 4月22日(水) | 地区会(小学校) | 今年度の研究内容の検討 |
| 第2回 | 5月27日(水) | 地区会(高校) | 高校世界史Aにおける共生のテーマ化案の検討 |
| 第3回 | 6月24日(水) | 附属研究全体会 | |
| 第4回 | 9月16日(水) | 地区会(中学校) | インフルエンザの感染の流行及び防止のため中止 |
| 第5回 | 10月28日(水) | 地区会(小学校) | 小学校で育てたい児童像、中学校で育てたい生徒像 |
| 第6回 | 11月18日(水) | 地区会(中学校) | ※11月14日(土)の中学校公開研究会に振替 |
| 第7回 | 1月27日(水) | 地区会(高校) | 高校で育てたい生徒像 |
| 第8回 | 2月24日(水) | 社会部会全体会 | |

1. 4. 研究の成果と課題

第1回の地区会では5つのモデル領域での共通カリキュラムの作成と共通教材の開発の実現化についての方向性を協議したが、5つのモデルと整合性が難しい学習内容をどのように共通化するかが問題となった。第2回の地区会では第1回の問題の提起を受けて、高校世界史Aでの「人間集団の共生関係」「環境との共生」「文化論」といった視点からの提案が行われた。その際、その提案を通して各領域で共通する育てたい児童や生徒の力を明らかにする必要があるのではという問題の提起が行われた。第4回以降の地区会では、その提起を受けてあらためて各学校段階で育てたい児童像や生徒像を提案し、その提案をもとに小中高で育てたい児童像や生徒像の共通理解を図ることにした。以上のように、今年度の研究では5つのモデル領域における共通カリキュラムの作成と共通教材の開発の実現化を図るという点、各学校でカリキュラムや実践事例を持ち寄り検討を行うという点では具体的な研究成果を示すことはできなかった。この点は来年度の課題と言えるが、一方で改めて各学校段階での領域、分野、科目での学習内容や育てたい力に関する考え方を共通理解できたことは一つの成果と言える。(文責：世田谷中学校 二川正浩)

2. 小金井地区 研究報告

2. 1. 研究テーマ

「地域学習で児童・生徒に身につけさせたい力～地域認識の調査を生かした授業づくりに向けて⑤～」

2. 2. 研究テーマ設定の理由と本年度の取り組み

小金井地区では、これまで児童・生徒の地域認識の深まりに着目して、継続的に研究に取り組んできた。ここでは、①小金井市の水と緑についての学習資料の作成、②児童・生徒の通学範囲にある区市の地域素材情報マップの作成、③児童・生徒の地域に対する意識調査などを行ってきた。

研究に取り組む中で、私たちは「児童・生徒は、自分たちが住んでいる地域に対し、具体的なイメージはあまりもってなく、日々通っている学校の所在地である小金井市についても曖昧な認識しかもっていない。こ

これらの認識は、学年が進行していくにしたがって改善されるものではない。」という問題意識を抱き、地域学習の指導内容や指導方法の具現化を目指してきている。昨年度の研究では、地域学習の内容はもとより、その指導方法に着目して授業実践を通じた検討を行ってきた。本年度もそれを継続していくこととし、加えて、新学習指導要領を受けて新たな地域素材の開発（小学校第4学年「私たちの東京」）に向けた検討を行った。

2. 3. 研究の経過及び概略

- 第1回 4月22日 地区会 テーマ・年間の研究内容の検討
- 第2回 5月27日 巡検 浅草地区の巡検（小学校第4学年「私たちの東京」）
- 第3回 6月24日 全体会
- 第4回 9月16日 地区会 「小笠原に空港は必要か」指導計画検討（小学校第4学年「私たちの東京」）
- 第5回 10月28日 地区会 小・中学校の年間指導計画全体の検討
- 第6回 11月20日 授業参観・協議 「伝統文化の継承について」（中学校第3学年）
- 第7回 2月5日 授業参観・協議 「小笠原に空港は必要か」（小学校第4学年）
- 第8回 2月24日 社会科部全体会

2. 4. 成果と課題

本年度は、特に、小学校の年間指導計画の第4学年の「私たちの東京」を中心に大幅見直しをし、作成を行った。見直しをするに当たっては、児童・生徒の実態や指導内容を情報交換し合い、小中9か年で児童・生徒にどのような地域認識を深めていくかの観点に立って行った。そこで検討された授業については、2月5日に、地区以外の先生方にも授業公開し、成果を伝えるとともに、様々なご意見をいただいた。今後の課題としては、さらなる地域素材の開発が上げられる。また、これまで指導内容、及び、指導方法の系統性を検討してきているが、このことについては引き続き研究に取り組んでいくこととする。（文責：小金井小学校 横尾康幸）

3. 大泉地区研究報告

3-1 研究テーマ

「大泉地区で求める児童・生徒像」

3-2 研究の目的

大泉地区では、「国際」を「キーワード」とした改革が行われている。統合再編された国際中等教育学校も3年目を迎えた。また、小学校においても鋭意改革が進められているところである。このような状況下、大泉地区で求められる児童・生徒像を明らかにし、「国際」というキーワードをもって、3校が協働して教育活動にあたっていこうと考えた。

3-3 研究の経過

- 第1回 4月22日（水） 地区会 今年度の研究テーマと年間計画の設定
- 第2回 5月27日（水） 地区会 *国際中等教育学校行事のため 流会
- 第3回 6月24日（水） 全体会 （大学）
- 第4回 9月16日（水） 地区会 中等教育学校のNIE（Newspaper in education）実践報告
- 第5回 10月28日（水） 地区会 小学校の実践報告
- 第6回 11月04日（水） 地区会 中等教育学校のJSL社会科の公開授業・研究協議会
- 第7回 11月18日（水） 地区会 高校（大泉校舎）の公開授業・研究協議会
- 第8回 1月27日（水） 地区会 1年間の活動の総括と来年度の研究計画
- 第9回 2月24日（水） 全体社会科部会

3-4 成果と課題

昨年度からの申し送り事項として、以下の2項目が挙がっていた。

- 「国際中等教育学校が求める生徒像を大泉地区の教員が共有する」
- 「小学校と国際中等教育学校とが連携し、12カ年の児童・生徒の追跡調査を行っていく」

→ 児童・生徒の作品を持ち寄り、授業時の学習への姿勢等を報告しあう。

今年度は、「百聞は一見に如かず」のスローガンのもと、児童・生徒の作品を中心とした協議会および中等教育学校・高校における公開授業の実践を展開した。机上の空論ではない、大泉地区が求める児童・生徒像を教員が共有できたと考える。ただし、小学校において素晴らしい作品づくりができていた児童は、中等教育学校進学後も素晴らしい成果を上げているが、もう少し頑張ってもらいたいと考えていた児童の伸長があまり見られないという課題も明らかとなった。上級学校における生徒の変容を図るための知的好奇心を喚起する授業づくりの必要性とともに、小学校段階における学びの楽しさを実感させる授業づくりが喫緊の課題である。

(文責：国際中等教育学校 古家正暢)

4. 竹早地区 研究報告

4. 1. 研究テーマ

小中連携社会科カリキュラムの構想。

4. 2. テーマに関して

24年度に小中連携カリキュラム完成を目指し、子どもの姿やこれまで積み重ねてきた実践からつくりあげることを考えてきた。

4. 3. 研究の経過

4/22 今年度の研究の方向性検討・今年度のスケジュール検討 5/27 「育てたい子ども像」検討
6/24 全体会 9/16 「認識・探究の特色と指導の重点」検討
10/28 公開研提案授業検討 11/14 幼小中連携公開研究会
11/18 公開研究会のふり返り 1/27 今年度の研究のまとめ（紀要作成に向けて）

4. 4. 研究の概要

(1) 社会科で育てたい子ども像 2008、09年度は、小中の整合性をより明確にするよう改良を加え、「育てたい子どもの姿・力・認識・価値」の5つの観点にもとづいて、小中の違いや関連性が明らかになるような記述にすることができた。

(2) 「認識・探究の特色と指導の重点」の改訂 2009年度には、(1)の5つの観点にもとづいて、各ステップ毎に「育てたい子どもの姿・力・認識・価値」の目標を加えた。これによって、小3から中3までの発達段階を踏まえ、関連する単元の実践研究を進めていく上での土台となるものを示せた。

(3) 小6旧担任と中1担任との連携 今年度の社会科グループには、中1担任と、その子たちが小学校卒業時の旧担任がおり、年度初めから子どもについての情報交換を活発におこなってきた。また、お互いの授業参観の機会も設け、授業の進め方や子どもの様子についても協議をおこなってきた。今年度は、こうした状況を活用し、小中の教員が、具体的な子どもの姿や授業のあり方について、情報交換をおこなうことで連携を強化させてきた。

(3) 小学校5年生、中学校1年生における「日本の工業」「認識・探究の特色」と「指導の重点」によると小学校5年生段階での指導の重点としては、具体的な物や人と関わる体験的な活動、意見交換の場、自分に立ち戻って考える場の設定をあげている。また中学校1年生段階では、抽象的な概念を使った説明の場、世界的視野から身近な地域、日本の地理的・歴史的な特色を見つめる場、価値観を見直す場の設定をあげている。こうした指導の重点を考慮し、本実践では、それぞれの学年の授業・活動の中で、「日本の工業」について、内容の取り扱いと活動及び学習過程の2つを意識して授業を組み立ててきた。

(4) 成果と課題 今年度は、「認識・探究の特色と指導の重点」の表に、「社会科で育てたい子ども像」の5つの観点にもとづいて、各ステップ毎の「育てたい子どもの姿・力・認識・価値」の目標を加えた。これによって、小3から中3までの発達段階を踏まえて、関連する単元の具体的な目標を示すことができた。小中連携カリキュラムの作成にあたって、今年度の成果をもとに、関連を意識した重点単元を増やしていき、児童生徒の発達段階に応じた適切な指導内容や、具体的な方法論の工夫、教材開発をすすめ、実践を通じて検証しながら、カリキュラムの全体像をつくりあげたい。

(文責：竹早小学校 清水 大)

Ⅲ. 算 数・数 学 科

1. 世田谷地区研究報告

1. 1. 研究主題

小中高における算数・数学的活動を重視した授業の展開

1. 2. 研究の概要

(1) 附属世田谷小学校

小学校においては、附属世田谷小より、算数的活動に関する実践事例の報告があった。具体的には、10より大きい数に関する実践、面積の導入に関する実践、極限の考えに関する実践であり、算数的活動について共通理解を図った。この他にも、世田谷算数夏期セミナー、世田谷算数授業討論会などを実施し、授業研究を通して、共通理解を図った。また、中学校での現職研修において小学校の算数的活動についての実践事例を報告した。

(2) 附属世田谷中学校

「興味・関心を高め、数学的に考える力を育む指導」をテーマとして、日々の授業実践を中心として研究を進めてきた。特に今年度は数学的活動を促す授業実践を中心として、数学的に考える力を育む指導のあり方について検討してきた。興味・関心を高めること、数学的に考える力を育むことと数学的活動を促す指導との関係について検討し、授業実践を行ってきた。また、夏、春の現職研修セミナーや附属学校研究会を通して、研究成果の一部を発表し、意見を頂いた。特に今年度は、関附連栃木大会で発表する機会を得るとともに、本校公開研究会11月14日（土）において、数学的活動を取り入れ数学的に考える力を育む指導を主題とした授業研究会をもつこともできた（授業者：鈴木 誠、中学3年対象）。公開研究会の研究討議では、数学的活動の広がり、題材の持つ可能性、望ましい数学的活動について討議を行うことができた。

(3) 附属高等学校

高校からは、図形の性質を見出す活動、数の性質を見出す活動、日常生活や社会で数学を利用する活動、という3つの分類にわけて、数学的活動の具体的な実践例を紹介し、それらについて協議した。

11月に実施した公開研究大会において、数学的活動を重視した授業実践を行った。具体的には、数学I「データの分析」（授業者 青山久美子）では、統計の基本的な考えを理解するとともに、それをを用いてデータを整理・分析し傾向を把握できるようにするため、班毎に調べたいテーマを決め、収集したデータを持ち寄り、パソコンを利用して散布図を作成してデータを分析・検証した。数学A「整数の性質」（授業者 吉岡雄一）では、整数の性質の学習を通して、「性質の発見」→「解釈」→「証明」という数学的活動を体験した。特にユークリッドの互除法を取り上げ、その原理を理解し具体的な数値に対して互除法が利用できるようにするため、その導入として紙片を用いた授業法を提示した。また、その研究協議会に附属世田谷中学校の鈴木教諭を招き、中学校での授業実践の報告してもらうことで、より一層中高の連携が深まるよう留意した

2. 小金井地区研究報告

2. 1. 研究主題 「数学的表現力を高める指導の工夫」

2. 2. 今年度の重点 授業研究を通して、子どもたちの表現力を高めることで思考力を高めていく。

2. 3. 研究の概要

(1) 小学校における取り組み

新指導要領の目標に『表現する能力を育てる』という文言が新しく加わったことから、表現力が重視されてきていることがわかる。この表現する能力は、考える能力と互いに補完しあう関係にある。そこで、考え方の系統、特に割合の考え方に着目して、思考力を高めていこうと考えた。

第2学年「分数」（稲垣悦子）では、新指導要領で第2学年となった分数の学習では、量分数ではなく分割分数から導入し、割合分数へとつなげた。第3学年「倍とわり算」（青山尚司）では、1に当たる量を提示

しない問題で、児童自らが、言葉の式やテープ図、数直線図等の表現方法を用いて説明する場面を大切に、「倍」の数量関係の意味理解を図った。第4学年「分数と小数」(高橋丈夫)では、割合の学習につながる考え方の素地指導を視野に入れつつ、「分数」と「小数」の学習内容を積極的に関連づけて指導した。そして、第5学年「単位量当たりの大きさ」(長島寛和)では、割合の学習の一環として、「1」にそろえることが、いつでもできる比べ方であることに必然性をもたせながら気づかせることをねらって実践を行った。

(文責：稲垣)

(2) 中学校における取り組み 第2学年「多角形の内角の和」(11月20日実施) 授業者：樺沢 公一

「課題意識を高め必要感をもって証明する図形の論証指導」という教科主題を設定し、研究授業を行った。三角形の内角の和が 180° であるということを根拠にして、多角形の内角の和を求めることを課題とした。求め方の説明は様々であるが、どれも三角形の内角の和が 180° であることを根拠としており、お互いの説明の根拠や前提を問う活発な議論が期待できると考えた。このような数学的に表現する学習活動を通して、証明の基本的な意味や考え方を理解させることをねらった。

授業では、考えを図で表現したり、口頭で説明したり、よみ取ったりする活動を重視した。上述の期待通り、様々な考え方が出され、授業終了後もしばらく生徒同士で活発に議論する光景が見られた。また、さらに2時間にわたって授業を行い、それぞれの考えを吟味した。これら一連の授業を通して、生徒は、説明の根拠を明確にすることや正確に説明することを求めるようになり、お互いの説明のよさを実感することができた。このことから、証明の基本的な意味や考え方を理解させるというねらいは、おおむね達成することができたと考えられる。

本実践で得られた主な知見を三つ示す。一つ目は、授業の導入では、生徒の課題意識を高めるための具体的に丁寧なやりとりが大切であること。二つ目は、議論の前提を確認したり、焦点をしばったりするための教材研究をしっかりと行っておくこと。三つ目は、論証指導の導入では、多少時間がかかっても、口頭での説明や子ども同士の議論の場を多くつくり、論証の感覚的な理解や言葉への敏感さを培うことが肝要であることである。

3. 大泉地区研究報告

3. 1. 研究主題

「算数・数学的活動とその評価に関する研究」

3. 2. 研究の概要

大泉地区では、昨年度より算数・数学的活動に焦点をあてた研究を行っている。今年度は、その方向性を継続する一方で、従来課題とされている数学的活動の評価も研究対象に加えた。海外の教科書の検討、授業実践、レポート評価の検討を通して研究を進めた結果、以下に示す成果が得られた。

(1) カナダにおける数学教育の検討 (高等学校大泉校舎)

カナダの数学科カリキュラムや教科書、指導の実際について報告がなされた。特に、カナダの数学科教科書が世界やカナダとのつながりを重視している点が明らかにされた。

(2) 「100より大きいかず」の導入についての実践報告 (大泉小学校)

小学校第2学年の単元である「100より大きいかず」の導入についての授業実践報告がなされた。実践の結果、多くの1円玉を用意して金額を数えさせる教材の有効性が示唆された。

(3) 作業を通した授業の創造について (国際中等教育学校)

電波の反射板を題材として放物線を探究する授業実践の報告がなされた。また、国際中等教育学校が取り組んでいる国際バカロレアのMYPに基づく評価方法が紹介され、レポート評価についての示唆が得られるとともに、課題が明らかにされた。

(4) 高等部における個別課題・宿題(ワークシート)を通した数学の段階的指導～事例を通して指導の段階

を考える～（特別支援学校）

特別支援の対象生徒が生活に必要な数学の力を忘れないようにすること、より生活で使いやすいように伸ばすことを目的としたワークシートとその段階的な指導について提案がなされた。事例研究の結果、ワークシートの有効性が示唆された。

(5) 「見つけよう！活用しよう！きまり！」の授業公開（大泉小学校）

比例のグラフから事象の様子をよみとる授業が公開された。生徒の活動を実現する教材と、生徒の授業中における活動を評価する机間巡視について示唆が得られた。

3. 3. 次年度に向けて

算数・数学的活動の実現とその評価については、今後の算数・数学教育においてより一層の研究が求められている。今年度得られた示唆をもとに、さらに事例を積み上げていく予定である。

4. 竹早地区研究報告

4. 1. 研究主題

「主体性を育む小中連携カリキュラムの構想」～『関数』のカリキュラム作成に焦点をあてて～

4. 2. 研究の概要

(1) 算数・数学のカリキュラムについて

①カリキュラムのフォーマット

| ステージ ステップ | 教科に関する 子どもの特徴 | 〔学習目標〕 | | | | |
|--------------|------------------|--------|---------|--------|-------|-------|
| | | 変数の設定 | 関数関係の把握 | 数学的な処理 | 結論の吟味 | 用語・記号 |
| | | | | | | |

②『関数』のカリキュラムの柱立ての再設定

本地区の『関数』のカリキュラムがめざす“育てたい子ども像”に、「関数を身近な問題の解決に利用できる子」がある。関数を活用して問題を解決する過程を想定したとき、子どもは次のような過程を辿ることが期待できる。すなわち、事象の中から問題の解決につながりそうな2つの変数を設定し、その2つの変数がどのような関数関係にあるのかを表やグラフに表して把握し、把握した関数に関する数学的な処理を通して得られた結果を再び事象に戻して吟味するという解決過程である。この問題解決過程に沿った観点の設定が、上記した本カリキュラムの目標の達成に有効ではないかと考え、「変数の設定」「関数関係の把握」「数学的な処理」「結論の吟味」という4つの観点をカリキュラムの柱に設定することにした。

なお、昨年度考案した「望ましい態度」という観点は、この4つの観点に基づいて形成されるものと考え、これらとは別に位置づく上位の観点として検討してきた。そこで、今年度は「望ましい態度」という観点を「学習目標」ということばで置き換え、4つの観点の上位に位置づけた。

(2) 一般にも公開した授業実践

11月14日（土）竹早幼小中公開研究会

授業者：山田剛史 小4「おこづかいは、いつ追いつくか？」

授業者：小岩 大 中2「歩行者に追いつくには？」

1月16日（土）第2回竹早地区算数・数学授業研究会

授業者：山田剛史 小4「電話で広さを伝えよう」

授業者：小野田啓子 中1「立体の特徴を調べよう」

4. 3. 今後の研究の方向性

◇小中での実践授業をお互いにひらきあい、カリキュラムを検証し、修正を加えていく。

◇カリキュラム作成については、「関数」に限らず他の学習内容にも広げていく。

IV. 理 科

附属研究会 世田谷地区 報告書

1. 本年度の研究テーマ

平成21年度 附属学校研究会プロジェクト研究

「教育実習を基軸とした理科教員養成課程の学習方法・カリキュラムの研究Ⅰ」

2. 研究の概要

世田谷地区は、これまで小中高校の教員が連携を図りさまざまな研究を進めてきた実績があり、本研究で、教育実習を取り上げ、教育実習に至るまでの過程、教育実習期間中、実習後の指導、全体を見通した問題点の把握と改善方法について小中高校教員の連携を深めながら研究を進めていく事が可能である。

そこで、平成21年度附属学校研究会プロジェクトとして本研究を申請したところ認可され、「教育実習を基軸とした理科教員養成課程の学習方法・カリキュラムの研究Ⅰ」という研究テーマで、本学理科教育教室と共に共同研究に取り組んだ。

これまで、小学校、中学校、高等学校の複数の免許の取得を希望する学生がいるにもかかわらず、小中高校間で、教育実習についての情報交換、比較検討、連携が強くなされる事は殆どなかった。

理科離れや特に小学校理科教員の理科指導力の低下が社会問題にまで取り上げるようになった現在、理科教員養成課程の学習方法・カリキュラムの改善に資することは喫緊の課題であるので、今年度はこの研究テーマで取り組む事とした。

3. 実践

今年度は、小中高校で教育実習を行った学生に、小学校時代から大学時代までにどのような理科実験に触れてきたのかなどを主旨とするアンケートをとった。その結果、幾つかの深刻な課題が表面化した。また、小学校理科における新たな視点や教材観の提案として、高校教員が小学生に対する研究授業も全国小学校理科大会にて実施し、全国の数多くの小学校の教員に提案した。その詳細については本紀要に別途報告した。

4. 研究の成果と次年度の取り組み

今年度の教育実習生に対するアンケートの結果や授業実践などから、教育実習の問題点が得られるとともに、授業改善の提案をする事ができた。次年度は、小中高校において浮上した幾つかの問題点について解決されるべく研究を進めていきたい。

(文責 岩藤英司)



写真1 研究協議の様子



写真2 世田谷地区研究メンバー (一部)

附属合同研究会 竹早地区 報告書

1. 今年度の研究テーマ

竹早地区幼・小・中連携カリキュラムと新しい学習指導要領の接続について焦点をあて、理科の立場から授業実践を通して「理科の小中連携カリキュラム」（以下、連携カリキュラム）を構想し検証する。

2. 研究の経緯

3年前から、連携研究における竹早地区理科部は、小中学校の教科（理科、算数・数学、技術・家庭）がひとまとまりになった「自然グループ」の中で研究を進めてきた。一昨年度、公開研究会において教科・領域、及び子ども理解における異校種間の接続を焦点として、竹早地区幼・小・中連携カリキュラムの研究成果を発表し、昨年度は、主に小学校3～4学年、中学校2～3学年に焦点をあて、かつ教科に重点をあてて研究を進めた。そして新しい学習指導要領と竹早地区連携カリキュラムとの関連を整理し、授業研究会において、その基本的な考え方と実践事例を提案した。これらの研究はいずれも竹早地区連携カリキュラムのテーマである「子どもの主体性を育む」の具現化を図ったものでもあり、それぞれの段階で「理科における主体性」についても論じてきた。今年度はそれらをまとめ、小学校・中学校における授業実践に寄与できる普遍性をもった連携カリキュラムを構想し、その妥当性の検討及び授業実践による検証を行い、11月14日に行われた公開研究会において発表した。またその中で、現代の理科教育が抱える今日的課題に対する1つの解決法として、連携カリキュラム内で想定した学習目標に基づくルーブリックの作成とその有用性について検証した。また、今年度も「点描法を活用した観察活動」を、小学校5年生と中学校1年生の生物单元の中でそれぞれ実施した。

3. 研究の概要

下記の日程で（1）授業研究会、（2）点描法の授業を行った。

（1）授業研究会

| 日時 | 対象学年 | 単元 | 授業者 | 助言者 | 位置づけ |
|--------|-------|-----------|------|------------------|---------------------------|
| 7月10日 | 小学校6年 | ほねほね探検隊 | 佐川勝史 | 横浜国立大学教授 森本信也 | 幼小中連携研究会自然グループ |
| | 中学校1年 | 光 ～反射の実験～ | 鈴木一成 | | |
| 10月23日 | 小学校6年 | 電気の利用 | 佐川勝史 | | |
| | 中学校1年 | プラスチックの性質 | 鈴木一成 | | |
| 11月14日 | 小学校6年 | 電気の利用 | 佐川勝史 | | 幼小中連携研究会自然グループ (公開研究会) |
| | 中学校1年 | プラスチックの性質 | 鈴木一成 | | |

（2）「点描法を活用した観察活動による観察眼の育成」の授業の実施

| 日時 | 対象学年 | 授業者 | 位置づけ |
|-------|-------|-----------|---------------|
| 12月5日 | 小学校5年 | 勝岡幸雄・佐川勝史 | 小学校理科部・中学校理科部 |
| 7月14日 | 中学校1年 | 勝岡幸雄・鈴木一成 | |

4. 成果と課題

今回作成した連携カリキュラムは「学年・ステージ・ステップ」「教科から見た子どもの特徴と配慮事項」「学習目標」「主な評価の視点と内容」「キーワード」「概念の柱」という6項目をつくり、一覧表の形で作成した。これらの項目立ての目的は、小・中学校の現場でこの連携カリキュラムを少しでも活用しやすいものにあることにある。また、授業研究会では、ルーブリックが授業に対する児童・生徒のより主体的参加に寄与する事が示唆された。これからも事例研究を進めることを通して、連携カリキュラムの一層の洗練を図ることが、今後の中心的課題である。

1. 本年度の研究テーマ

小金井地区の児童・生徒の時間や空間に関する素朴概念の調査

2. 研究の経緯

小金井地区では児童・生徒の地学分野に関する時間と空間に関する認識を調べることで、今後の理科授業に生かすことを目的として、以下のような調査を行った。

時：2009年12月中旬 方法：選択式のアンケート調査 対象：小学校3～6年 中学校

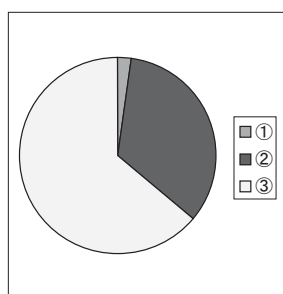
質問：距離感について1問、地球の歴史について3問、雲の高さについて1問

月と太陽の距離について1問、地下の様子について3問

3. アンケート結果から見えた小金井地区の子どもたちの実態

【小学校】

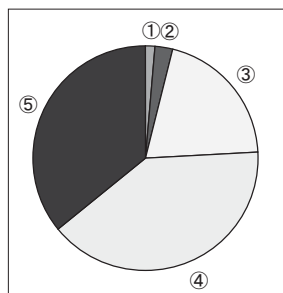
結果が最も顕著に表れたのは、右の質問である。全体のおよそ64%の児童が実際の高さ333mをかなり長い距離として感じていることが分かった。このことから、児童は高さの縦の長さの感じが横の長さの感じが長く感じている児童が多くみられることが分かる。



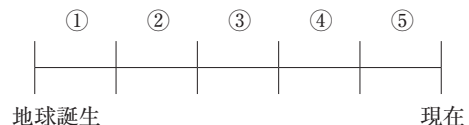
【問】 東京タワーを横にたおしたら、どのくらいの長さになるでしょうか。

- ① 大学東門から小学校のはしまで
- ② 大学東門から中学校のはしまで
- ③ 大学東門から大学のはしまで

地下の様子についての質問でも同様で、実際の深さより深いと感じている児童が多くみられた。しかし、普段目にすることができない地下の様子を具体的に考えることができていないことも原因として考えられる。



【問】 人類が誕生したのは、以下の数直線上のどこだと思いますか。



地球の歴史についての質問では、人類は実際よりも古くから誕生していると認識しており、地球全体の歴史に対して長い時間人類が生息していると考えている児童が多いようだ。

【中学校】

上記の「東京タワー」の問いについて、正解である「②」と回答した生徒の割合は、1年49%、2年49%、3年65%であった。学年が上がるにつれて距離感は定まってきている。それでも「③」と回答する生徒が3年生においても33%であることから、「縦と横」では距離感のずれがあることが分かる。

「人類の誕生」については、正解「⑤」の回答率が、1年67%、2年78%、3年85%であった。この問いでは「最初の生物の誕生」と「恐竜の誕生」についても質問した。本校では、2年次の5月に「秩父・長瀨地質実習」を2泊3日で実施している。そこでの学習体験が、地質年代という「時間の長さ」の認識に有効であることが分かる結果が得られた。教室での学習において身につけた「知識」を、野外実習にて「検証」する過程を大切にしていきたい。

4. 今後の課題

調査結果より、児童の縦方向の距離感と横方向の距離感、地球の歴史的な時間感覚の概念が、実際と大きく異なっていることが明らかとなった。これらの結果を踏まえながら、今後の理科の指導に資料の提示方法や教材の工夫などの面でどのように生かしていくことが課題となった。

(文責 附属小金井小学校 松田暢元)

附属学校合同研究会 大泉地区報告書

1. 本年の研究テーマ

「小・中。高の連携を図った理科カリキュラムの開発～国際化に対応した理科学習の創造」

2. 活動報告

小学校段階については、1月に

小学校第4学年：理科「ふしぎな ふわふわゴースト」(森下)

小学校第4学年：理科 取り出し個別学習「自分の課題に取り組もう」(表、森田、長尾)を、

公開研究発表会 国際社会に生きる豊かな学力の育成 [海外帰国児童教育学級(国際学級)開設40周年]

「海外生活体験児童と一般学級児童との共生をはかる学校体制の整備」～お互いを認め合って、ともに学べる体制とカリキュラム構築～にて公開し、公開授業についてその研究討議を行い、互いの研鑽を深めた。

中等教育学校、高等学校段階については、国際中等教育学校で国際バカロレア機構によるMiddle Years Programme 導入から3年目を迎え、前期課程の生徒がはじめて全学年揃ったことにより、また、国際バカロレア機構の認定校になるための公式訪問を受ける年であったため、Middle Years Programmeとその評価基準・評価方法についての研修と議論を積極的に行った。さらに、国際化の中では視野を広げて世界の動向も把握しておくことは重要であるという視点から、中等教育学校教諭が委員を務めている国際生物オリンピックや国際化学オリンピックについての、指導者としての参加報告や研修を行った。さらに、国際中等教育学校では英語によるイメージン理科(3年生)とプレ・イメージン理科の実践を通して、イメージン理科の実践方法について検討を加えた。

Middle Years Programmeの評価観点

| | | |
|------------|--|--|
| Criteria A | One world | 生徒は科学と社会の相互依存の関係を理解している必要がある。生徒は生活および社会における特定の問題を解決するのに科学がどう応用され、使用されるかについて論じることができなければならない。生徒には地域や地球全体の科学的な問題について探求し、科学および科学の発展と社会、経済、政治、環境、文化、倫理的要因との間の相互作用を評価する機会を与える必要がある。 |
| Criteria B | Communication in science | 生徒は科学的情報を伝達する際に自分が理解をしていることを実証できる必要がある。生徒は適切な科学用語、一連のコミュニケーション・モード、および最も適切なコミュニケーション・フォーマットを用いる必要がある。 |
| Criteria C | Knowledge and understanding of science | 生徒は、なじみのある状況においてもなじみのない状況においても、問題を解決するために、主要な科学的な思想および科学概念を応用できることによって、その思想および概念を理解していることを示す必要がある。生徒は批判的思考のスキルを発達させ、科学的な情報を分析、評価できなければならない。 |
| Criteria D | Scientific inquiry | 生徒は自主的に科学的調査を計画し、実行できなければならない。生徒は、調査によって検証可能な問題について述べ、適切な仮説を立て、変数を特定、操作し、手段と材料を含む適切な調査計画を立て、その手段を評価できる必要がある。 |
| Criteria E | Processing data | データ処理とは、生徒がデータを体系づけ処理できるようにするためのものである。生徒はデータを体系づけ、データを数値計算によって図形形態(表、グラフ、チャート)に変換し、適切な結論を導き出して説明できる必要がある。 |
| Criteria F | Attitudes in science | この規準は、生徒の安全に対する態度、経緯、協力を助長するためのものである。生徒は以下のことができなければならない。 材料とテクニックを巧みに安全に用いて、生活環境及び非生活環境に経緯を示しつつ、科学的調査を行う。 チームの一員として効果的に作業をして互いに協力をし合い、他者の意見を認め尊重すると同時に、安全な作業環境を確保する。 |

3. 次年度に向けて

今後とも小学校と国際中等教育学校との連携を深めるとともに、国際中等教育学校においては後期課程に生徒が進学したことにより、海外の大学への進学も見据えたカリキュラムの深化にも努める必要がある。

V. 音 楽 科

平成21年度 附属学校研究会 音楽部会 研究活動報告

平成21年度研究テーマ

「学校における音楽科の果たす役割」

1. 研究の概要

本年度は、昨年度に引き続き「学校における音楽科の果たす役割」というテーマで研究を推進することとなった。各校における取組みなど実践報告を行った。夏には、「音楽 + α の視点が授業を変える—音楽室の再発見 学校をアトスペースに—」というテーマで、日本教育大学協会全国音楽科部会研究会 東京大会が行われ、学校現場での音楽教育の果たす役割について、全国各地からの先生方とグループディスカッションを行った。また、11月には、特別支援学校の視察を行い、特別支援教育の現状を学んだ。新しい学習指導要領のもと、私たちが子どもとどう音楽で関わっていくか、今後も考えたい。

2. 本年度の研究会場校

- ・ 第1回目（4月22日）竹早中
- ・ 第2回目（5月27日）竹早中
- ・ 第3回目（6月24日）大学芸術館
- ・ 第4回目（9月16日）地区会
- ・ 第5回目（10月28日）地区会
- ・ 第6回目（11月18日）特別支援
- ・ 第7回目（1月27日）地区会
- ・ 第8回目（2月24日）世田谷小学校

3. 本年度の研究活動

第1回目（4月22日）竹早中

- ・ 今年度のメンバー自己紹介
- ・ 本年度の研究内容と、「研究会場校」について
- ・ 本年度の研究テーマについて
- ・ 夏の大会について

第2回目（5月27日）竹早中

- ・ 夏の大会について
- ・ 次回の音楽部会の内容について

第3回目（6月24日）大学芸術館

省略

第4回目（9月16日）地区会

第5回目（10月28日）地区会

- ・ 1学期の実践に関する情報交換
- ・ 2学期の実践や音楽的行事についての情報交換
- ・ 教育実習の実施状況についての報告、意見交換

- ・夏の大会の、仕事分担の取りまとめ
- ・次年度への引き継ぎ事項確認

第6回目（11月18日）特別支援学校

- ・特別支援教育の現状を学ぶ
- ・夏の大会のまとめと報告、次年度開催について
- ・特別支援学校施設見学
- ・各校の研究についての報告と公開研究会の告知

第7回目（1月27日）地区会

- ・2学期の実践に関する情報交換
- ・3学期の実践や音楽的行事についての情報交換
- ・各行の公開研究会における音楽科教科提案等の作成、確認

第8回目（2月24日）世田谷小学校

- ・今年度の活動内容の統括
- ・次年度の予定と幹事校の確認
- ・平成22年度日本教育大学協会全国音楽科部会研究会の運営に関する協議

4. 今年度のまとめ

本年度も、各校でこれまでの取り組みなどの実践報告や、児童生徒、また担当された実習生の実態と現状について意見交換を行った。新しい学習指導要領を現場でどう具現化していくのかについては、昨年度も音楽部で話し合われてきたが、それぞれの学校でそれらをどうリンクさせ、目の前の子どもたちが音楽を楽しんでいると感じ、生涯音楽を楽しんでいけるのか、そのためには私たちはどう関わっていけばよいのか今後も検討・意見交換していきたい。

VI. 図画工作・美術

□平成21年度研究主題

図工美術の交流学習活動における成果の可能性

□研究内容

日々の教育実践をもとに、「交流学習」をキーワードとした、造形教育における、関わりあい育む活動について研究していく。

□研究記録

4月22日 第1回研究会（附属高等学校）

子供から始まる造形活動・双方向性の研究をベースに、今日的課題として附属学校としての附属の教育実習の深め方をさぐり、各校から実習における取り組みをリサーチし、問題点をあぶり出し、問題点から、今後の附属学校研究会図工・美術部会として、何ができるか、大学との連携も視野に入れ検討した。

5月27日 第2回研究会（小金井小）

教員養成大学における教育実習と図工・美術科教育のあり方について話し合う。そして、附属学校としての内容と方法について意見の交換をした。また、各地区から実習生への指導実践等を報告し合った。

9月16日 第3回研究会（大泉小）

次年度を見据えた研究テーマの精選。今年度中に新たなテーマを決め、来年度提案できる様に話し合う。小中高等の連携に可能性はないか。教育実習の実施の仕方に可能性はないか。等の意見が出される中、美術・図工を通じた交流学習活動についての研究に可能性を見つけることができた。前例として、世田谷中と竹早小との交流学習が行われ興味ある成果が得られている。交流する事で生じる子供達の育ちを分析・考察できたらと意見がまとまる。また、教科性を表出させた学習の提案が必要である事も確認された。

10月28日 第4回研究会（世田谷中）

昨年度までの「双方向性のある場面」とのつながりで他校や海外の学校との交流についての可能性を探っていく。具体的な実践はどうするのか。交流活動はどのような形とするのか。作品だけの交流では弱くないのか等活発な議論となった。また、学校のフィールドに限定せず、対社会・美術館などの可能性はないか等も話し合われた。今後、課題や問題点を明らかにしていくこととした。具体的な実践として、世田谷中学校のテーマ研究「英語の絵本」の作品を、竹早小学校に送り、小学生の反応とともに、中学生がどのような刺激を受け、変容があったかを調査していく計画も練られた。

11月18日 第5回研究会（竹早中）

研究推進委員より本年度の研究のまとめについての報告を受ける。その後、交流学習活動の実

実践報告。

竹早中は、小学校との連携交流活動について。世田谷小は、校内研よりポップアップの仕掛け、これまでの交流実践活動についての報告がされた。来年度への研究に向けて、交流の方法や目的、具体的な活動をどのようにとらえるかが議論された。双方向の交流について意見を出し合う。大泉国際中学ではフィンランドの学校と、生徒間での交流を提案された。世田谷中と竹早小との作品交流、絵本を通しての交流が提案された。これからの研究の方向性として、各校の実践と子供の活動を見守る事、自己の内面と他者との交流を課題とし、いろいろな実践を取り上げていくことが確認された。

1月27日 第6回研究会（特別支援）

特別支援学校の施設見学と交流活動を通じた実践報告。今後は、会場校の施設見学や実践報告、さらに担当校教師が講師となる造形活動講座の研修を企画する事が提案される。大泉国際中学では、フィンランドの学校との交流学习が具体化してきている。授業のプロモーションビデオの作成やお互いの学校の作品展示等が進行中。また、問題点として出てきたのは、美術教員のみでの国際交流は大変困難だという事。しかし、今回は通訳等仲介に入ってくれる方がいるので大変やりやすいとの報告があった。フィンランドについては、視察に行かれた先生より話が聞けた。フィンランドでは、手作業・手仕事を取り入れた活動がある。特別支援学校とその部分は大変よく似ている。発想から実現・表現に向けての過程における手仕事・手作業が教育では大切であると報告された。話し合いの中で、ぜひフィンランドに視察に行きたいという希望が出た。

□研究の成果と課題

昨年度、附属学校における図画工作・美術科の教員の大きな入れ替えがあった。そのため、研究の方向性に統一が見られなかったが、多くの話し合いの機会を得た事により、研究の核となる物が見えて来た。また、育てたい子供像として、造形活動を通して「生きる力」を育むという姿勢が大切であるという事の確認ができたのは、今後の研究に向けての大きな成果であると考えられる。

会場を各校分担する事により、各附属校の特色を視察する事ができた。教師間のスキルアップに繋がった。今後は、話し合いで出たように、それぞれの学校の特色を生かした研修ができるよう、実技研修も視野に入れて企画できるようにしていきたいと考えている。

今年度の始めに行われた、各校の教育実習生への取り組みの報告会は、お互いの実践を知るよい機会となり、今後の実習のあり方を模索していく上で大きな成果となった。

研究の方向として、交流学习活動を取り上げていく事にしぼれたのは大きな成果である。また、各校の交流学习活動の実践報告は、大きな学びとなった。今後の課題として、交流学习活動のねらいをさらにはっきりさせ、実践方法や子供達にとって、どんな学びとなるのかを研究していきたい。

研究会の話し合いの中で、フィンランドにおける美術教育について話題が多く出た。現地視察を視野に入れて、更なる研究をしていきたい。

Ⅶ. 体 育・保健体育科

1. 体育・保健体育科部会 研究活動の概要

1. 1. 今年度の研究活動

| | | | | | |
|-----|-------|---------------|-----|--------|------------|
| 第1回 | 4月22日 | 地区会・全体会（竹早地区） | 第5回 | 10月28日 | 校種別会 |
| 第2回 | 5月27日 | 校種別会 | 第6回 | 11月18日 | 地区会 |
| 第3回 | 6月24日 | 全体研究会（芸術館） | 第7回 | 1月27日 | 全体会（小金井地区） |
| 第4回 | 9月16日 | 地区会 | 第8回 | 2月24日 | 地区会（予定） |

1. 2. 体育・保健体育科部会全体研究会の概要

1. 2. 1. 第1回 4月22日 全体会（竹早地区）

- ・研究推進委員会の報告及び今年度各地区の研究活動予定報告、意見交換

1. 2. 2. 第7回 1月27日 全体会（小金井地区）

- ・今年度各地区の研究活動報告
- ・今年度校種別研究会の活動報告
- ・研究推進委員会の報告
- ・来年度部長、副部長役員選考

2. 世田谷地区

2. 1. 研究テーマ

「児童・生徒から見た体育科学習内容の検討 - 4・4・4区分による意識調査結果を手がかりとして -」

2. 2. 主題設定の理由

世田谷地区では、児童生徒から見た保健体育科の学習内容について、実態調査を進めてきた。体育学習における学習内の明確化が叫ばれる中、ボール運動領域の戦術学習や器械運動領域の技術学習、また、関わり合い等がその役を担う可能性が議論されてきたが、それらは大人側の視点であり、学習をしている児童・生徒は体育学習で何を学んできていると捉えてきているのかについては、丁寧な検討がなされていなかったことが、本研究を進める背景にある。昨年度の研究では、小学生、中学生、高校生にアンケートによる意識調査を用いて、児童・生徒の側から見た学習内容について検討し、体育学習において学習内容を明確にした。平成13年度より世田谷地区で作成してきた4・4・4制（第1期：小1～小4、第2期：小5～中2、第3期：中3～高3）区分によって再分析し、その学習区分の分け方に対する妥当性を検討する上での基礎的知見を得ることを目的とした。

2. 3. 研究の経緯（経過）

| | | | |
|-----|--------------------|-----|--------------------|
| 第1回 | 研究内容、研究方法の検討（4/22） | 第2回 | 昨年度の分析結果の再検討（5/27） |
| 第3回 | 分析方針の検討と決定（9/16） | 第4回 | 分析結果の検討、考察（11/18） |
| 第5回 | 全体会にて成果の報告（1/27） | 第6回 | 来年度への課題検討（2/24） |

2. 4. 研究の内容・方法

- ・小学校から高校まで、同一のアンケートを用いて意識調査を行い、因子分析の結果から、学習内容を抽出した。
- ・学習内容として考えられる項目から、学び取ったと感じられる項目の回答を求めた。
- ・カリキュラム構成区分や男女間でその内容に差異があるか分析、検討した。なお、今回の調査は小5～高3を対象にしているため、第2期と第3期での比較とした。

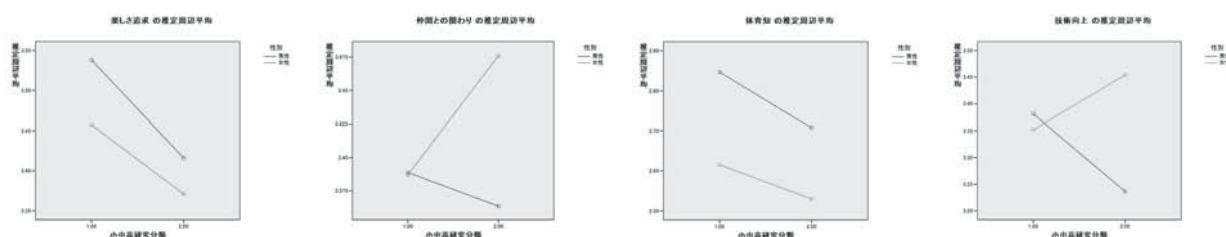
2. 5. 成果と課題

分析結果から得られた知見は以下の通りである。

- ・運動することの楽しさ志向は、男女ともに、第3期になると下がる。第3期においては、男女において有意な差が見られた。(男子>女子)
- ・仲間との関わり志向は、男子は第3期の方が高いが、女子は第2期の方が高い。
- ・体育知志向は、男子と女子の間に有意な差が見られた。(男子>女子)ともに、第2期の方が高い。
- ・技術向上は、男子は第2期>第3期、女子は第2期<第3期であった。また、第3期において、男女間に有意な差が見られた。(女子>男子)

今回の考察は、現状把握に留まっており、この結果からカリキュラム評価までには及んでいない。今後の課題としたい。

(文責：附属高校 佐藤 健太)



3. 小金井地区

3. 1. 研究テーマ

「体づくり運動の指導のあり方」

3. 2. 研究テーマ設定の理由

3校種の中でもともに研究を進めていくために、『動ける体をつくる』というキーワードから、基礎運動感覚を身につけること、自分自身の体について気づき知ること、運動量の確保・いろいろな運動経験を体験させることを追求してきた。

また、「体づくり運動」をカリキュラム上に位置づけるにあたって他領域ともからめた系統性をふまえること、各校・各部員の実践報告をし合うこと、昨年度まで研究を進めてきたコーディネーション運動の実践を活かしていくことを考慮した。

なお、昨年度までコーディネーション運動と並行して研究してきた「異校種間ダンスの実践」についても模索した。他教科との関連も図りつつ実践を重ねてきたが、今年度は校内カリキュラム上の位置づけが難しく、断念することとなった。

3. 3. 研究の経緯

- 4月 研究テーマ設定
- 9月 テーマについての実践報告
特別支援校 渡邊実践「移動する遊び」「鉄棒遊び」等
いかに日常につなげていくかという課題についての考察
- 11月 小金井小 長澤実践「跳の運動につながる運動遊び」等

3. 4. 方法と内容

各校の実践をカリキュラムと照らし合わせながら考察した。また、渡邊実践、長澤実践においては、実践のビデオを見ながら子どもの動き、運動のポイント、指導の改善等を話し合った。

3. 5. 成果と課題

各校の研究、公開研究会、校内研究会等の実践をも含め、様々な実践を通して考察を深めることができた。体力向上に直接つながる単元である特性をふまえ、今後の実践を重ねていきたい。

(文責：小金井小 長澤 仁志)

4. 大泉地区

4. 1. 研究テーマ

「発達段階に応じた体育の指導」一中・高一貫に伴う小・中・高の連携を生かしたカリキュラム開発

4. 2. 主題設定の理由

大泉地区に平成19年度より開設された「東京学芸大学附属国際中等教育学校」も、本年で3年目を迎えた。国際中等教育学校では、国際バカロレア機構(IBO)の教育理念、教育プログラムに基づき、その中期段階として中等教育課程(以下:MYP)カリキュラム作成と評価についての研究を進めている。

小・中・高(国際中等)の3校種が存在する大泉地区では現在、小学校に入学した子どもの半数以上が、12年間を大泉地区で過ごす割合が高い。そこで、これまで以上に小・中・高がそれぞれの児童・生徒の発達段階を踏まえ、連携をとったカリキュラムの開発・整備が必要であると考えられた。

4. 3. 研究の経緯

- ・本年度の研究テーマ及び単元配列の確認
- ・授業参観・・・小学校：タグラグビー、バスケットボール
国際中等：アルティメット、バスケットボール(3 on 3)
大泉校舎：バスケットボール
- ・本年度の研究のまとめ

4. 4. 研究の内容・方法

小学校「ゲーム」「ボール運動」、中・高「球技」に焦点を当て、特に技能の習得を児童・生徒がどのように図っているのかを分析した。そこで、小学校、国際中等教育学校ならびに附属高等学校大泉校舎における体育授業の参観を行うとともに、国際中等教育学校における4年次カリキュラムとあわせて、大泉地区の体育・保健体育科カリキュラムの系統性の検討を図った。

4. 5. 成果と課題

【成果】

3校種の授業参観を通して、児童・生徒の運動レベルの現状を把握し、指導手順を協議することができた。また、今後の12年間を見据えたカリキュラム作りをどう進めて行くかを検討し、国際中等教育における4年次カリキュラムを作成することができた。

【課題】

中・高の時期において、運動経験の不足によって技能の習得が大きく違うため、特に小学校段階において、多様な動き作りをしていくよう授業時数の確保をしていく必要がある。

(文責：大泉小 田島 宏一)

5. 竹早地区

5. 1. 研究テーマ

「幼小中の連携や一貫性を考慮したカリキュラムの研究 ～幼小中連携で取り組む心の健康教育～」

5. 2. 主題設定の理由

竹早地区幼小中連携研究の一環で組織された健康グループとして、テーマを意識した実践を積み重ねていくと同時に、「人間関係を築いていく力を高める」といった視点を幼小中11年間を見通したカリキュラムにおいてももつことで、より心の健康教育の効果を上げられると考えた。

今年度は、竹早地区保健体育部会の先行研究によって「リーダーシップとフォロアーシップ」が人間関係の活性化やグループのパフォーマンスに大きく影響することが明らかになっていたので、現行のカリキュラムに取り組む実践を行っていくことにした。

5. 3. 研究の経緯

第1回 研究内容、研究方法の検討（4/22）

第2回 幼小中連携研究との関連を検討、11月実践内容検討（9/16）

- ・幼小中研究会 小6「フラッグフットボール」、中3「バスケットボール」実践（11/14）
- ・公開授業後アンケートの分析と竹早地区の幼小中連携カリキュラム検討（11月～2月）

第3回 「小中合同体育」内容・方法の検討（11/18）

- ・小中合同体育（1月）

第4回 全体会にて成果の報告（1/27）

第5回 今年度のまとめと来年度への課題検討（2/24）

5. 4. 研究の内容・方法

①11月：小6と中3「公開研究会」

本研究では「リーダーシップとフォロアーシップ」を「人間関係を築いていく力」の1つとして重視し、発育・発達段階に応じたリーダーシップとフォロアーシップのあり方を検証していくことにした。また、本校スクールカウンセラーのアドバイスや本学教授との共同研究として、ソーシャルスキルの考え方を授業にとり入れ、コミュニケーションの活性化や円滑な人間関係の形成に役立てている。

子どもたちの発達段階に応じ、獲得させたい具体的な力のめやすを設定するにあたり、OECD（経済協力機構）が提唱した「コンピテンシーの定義と選択」（DeCeCo）を参考にした。その中で、研究のねらいに最もあてはまると考えられる、「多様な集団で交流する能力」のカテゴリーに着目し、このカテゴリーに含まれる個々の各キー・コンピテンシーをもとに、子どもたちの教育活動に即しためやすを作り、これらをより多く達成させていくことを目標とした。

今回の研究発表会では、体育分野「ボール運動（集団球技）」の単元の中から小6で「フラッグフットボール」を、中3女子では「バスケットボール」を題材にして授業実践を行なった。単元終了後に、対象学級で

ある小6の1学級と中3の4学級にアンケートを実施し、目標の達成度を分析していく。

②1月：小6＋中2「小中合同体育」

- ・小中2クラスずつで4クラスの合計160人。小は2時間連続で2種目実施（中4時間、小8時間）
- ・ブルボール、ソフトバレーボール、ユニホック、アルティメット、キンボールの5種目から選択（中は1種目、小は2種目）
- ・種目リーダー会、班長会、グループ反省時間をしっかり取り、児童・生徒の主体的活動を重視して運営する。各種目への連絡指示は種目リーダーを通じて数回行った。
- ・グループリーダーを毎回輪番とし、より多くの者にリーダー体験をさせる。
単元終了後にアンケートを実施し、目標の達成を分析する。

5. 5. 成果と今後の課題

- ・単元終了後の生徒アンケートは分析結果は、今年度竹早地区研究紀要で発表する予定である。
- ・心の教育としてのカリキュラムの柱を精選していく必要がある。
- ・竹早地区では、まず授業実践を行い、それを検討した上でカリキュラムに位置づけている。そのため、各学年における実践を今後より多く積み重ねていく必要がある。

6. 校種別会

6. 1. 小学校部会

- ・第2回 5月27日「バスケットボール」講師：笠松 具晃（大泉小）
- ・第5回 10月28日「跳び箱運動」講師：齋藤 祐一（世田谷小）
研究授業と協議会をおこなった。

6. 2. 中・高等学校部会

- ・第2回 5月27日「柔道の指導方法」講師：瀧澤 政彦（附属高）
- ・第5回 10月28日「ベースボール型種目の指導方法」講師：千葉 克之（国際中等教育）
指導方法研修会をおこなった。

（文責：竹早中 加藤 英明）

VIII. 技 術・家庭科

1. 技術分野

1. 1. 研究テーマ「教育実習事前指導の在り方について」

1. 2. 研究の概要

昨年度から附属学校技術科教員 4 名のうち 3 名が入れ替わり、過去10年間にわたり行ってきた教育実習事前指導についても、改めて情報の共有が必要になったという経緯から、昨年度行った実習指導を踏まえ、今年度ブラッシュアップをしていこう、というのが今年度の技術分野の研究テーマとなる。

過去技術分野では、実習前の事前指導として学生に全ての附属中学校を回らせ、附属の教員が授業見学や技能の習得、実習生としての心得などをねらいとして 2～4 時間のカリキュラムを学校ごとに作成し、指導を行ってきた。その結果、大学の授業では触れることが難しかった教員育成に関する必須事項を学生に身につけさせることが可能となった。また、大学側とも積極的に関わり、附属学校研究会の場で連絡及び協議の場を設け、より良い実習に向けて両者が歩みを共にしてきた。その中で、大学の授業としてどのようなスキルの習得が望まれるかについて意見交換し、それが確実に授業へ反映されていることも、この試みが寄与した結果だと言えよう。

今年度もこの形式を踏襲し、教育実習の更なる充実を目指した。

<第1回> 4月26日 小金井中学校（技術分野・家庭分野の合同部会）

- ・本年度の研究テーマおよび年間の方針、各附属研究会の会場を決定した。

研究テーマ「教育実習事前指導の在り方について」

- ・事前指導の日程及び会場校、指導方針を学部坂口先生・木下先生と共に決定した。

5/14 国際中等教育学校 「実習の心構えなど」

5/28 竹早中学校 「授業のポイントおよび授業見学」

6/18 小金井中学校 「授業見学およびディスカッション」

(6/26 配当校先必修オリエンテーション)

7/9 世田谷中学校 「指導案の検討」

事前指導の内容については、昨年度の実習生から回収したアンケートを基に、できるだけ授業見学の機会を与えられるよう検討した。その他の内容については、各校共通して実習生に必要なスキルは何かを考慮したうえで決定した。

<第2回> 5月27日 地区部会

- ・地区ごとに、事前指導の内容検討または事前指導の考察を行い、後日メールにて意見交換を行った。

<第3回> 6月24日 全体会

- ・全体会終了後、附属中前任者や学部講師を招き、各校での事前指導経過報告や大学内における学生個々の様子など、意見交換を中心に行った。

<第4回> 9月16日 地区部会

- ・教育実習を行いながら、各校ごとに考察を行い、以後メールにて意見交換を行った。

<第5回> 10月28日 大学内美術棟 授業ラボラトリー

- ・各校ごとに教育実習の報告をまとめ、集約した。報告内容は、①配当学生、②事前指導内容、③オリエンテーション、④夏期の事前指導内容、⑤実習期間、⑥その他意見交換を希望する事項。

- ・各校共通して挙げられた実習生に対する課題をまとめ、学部坂口先生・木下先生に報告し、それぞれ意見交換を行った。課題は以下のとおり。

- ・教科書を見ていない、内容の理解不足など、基礎的知識の不足。

- ・教育実習=勤務という認識が甘い。

- ・学部坂口先生・木下先生から、事後指導の報告があった。内容は事後指導として行った各実習生が作成した報告書の閲覧、学生の様子など。
- ・学部2年生全員と学部1年生数名が、実習生の研究授業を見学し、この試みについての意見交換を行った。

<第6回>11月18日 地区部会

- ・各校ごとに、来年度教育実習事前指導について案を練った。

<第7回>1月27日 小金井中学校

- ・今年度の課題を踏まえ、来年度教育実習事前指導についての意見交換、大学に対しての要望を集約した。

<第8回>2月24日 小金井中学校

- ・学部の教官を招き、附属側からの大学に対する要望を提出し、意見交換を行った。
- ・来年度の研究テーマについて意見交換を行った。

1. 3. 来年度に残る課題

昨年から感じていることではあるが、教育実習生のスキル不足や教育実習に対する意識の低下は今後も課題として挙がってくるのが懸念される。

技術分野は、学習内容が各学校によって異なるために、基礎的な部分だけをみても実習生における個々の能力差が激しい教科であろう。そしてこれは実習生の責任ではない。だからこそ大学と附属学校が連携し、まず基礎的な学力および技能の習得が必要であり、その土台が無ければその上に教員としてのスキルを積み上げることは不可能である。

また、教育実習に対する意識という点では、本教科だけではなく、他教科でも同様の点が指摘されるではなかろうか。これは大学および附属学校全体で取り組んでいくべき課題であると思われるが、まずは附属学校として充実した事前指導を提供することで、実習に対するモチベーションを高める役割を担っていきたい。技術科がその先導役になっていけたらと願う。

加えて、大学側と附属側が意見交換を行う場が限られていることにも触れておきたい。附属研究会や実習生の研究授業参観に参加いただける学部教官はごく少数に限られているが、教員養成のための大学である以上、これらの場に更なる参加を求めたい。
(文責 国際中等教育学校 馬田大輔)

2. 家庭分野

2. 1. 研究テーマ「家庭科教育における小中高等学校の連携」

2. 2. 研究の概要

本年度の家庭科部会は、小学校2名、中学校4名、高校1名、養護学校1名および大学の教官が参加した。家庭科教育における小・中・高の連携を大切にし、研究を続けることを確認した。現在、金融教育についてのプロジェクトが進められているが、そのほかにも、ジェンダー教育に関わる研究や道徳教育についても研究を継続している。その研究は、それぞれ、男女共同参画推進本部によるOPGE助成事業の助成金、道徳に関する研究費助成を受けた。どの研究についても、小中高等学校の連携を大切にして、各校でテーマにあわせた授業作りを実践していった。小学校では、家庭科、生活科、道徳などの授業に取り入れる可能性を探り、中学校では、小金井中学校と国際中等教育学校がそれぞれ切り口を変えて研究授業を行った。小中学校の研究に関する新しい取り組みについて報告を受け、高等学校での取り組み方について討議した。これらの各校の取り組みについては、附属研究会にて報告をし、必要があれば臨時の研究会を設けて、活発に研究をすすめた。

<第1回> 4月22日(水) 小金井中学校

- ・家庭科として、金融教育にどのように関わっていけるのか具体的な授業の展開や小中高等学校の連携のとり方について討議し、研究中の金融プロジェクトの報告をした。

<第2回> 5月27日(水) 竹早中学校

・教材の研究を行った。授業で教材を使用している動画を見て、どのような場面で授業に活用できるのか各校の立場で考え、意見交換をした。

<第3回> 6月24日(水) 全体会 大学：芸術館

・全体会終了後、教大協家庭科部門の報告を受けた。

<第4回> 9月16日(水) 地区会

・地区ごとに研究テーマに関する討議を行った。

<第5回> 10月28日(水) 附属高校

・「ジェンダーを意識した授業」について、各校の取り組みなどの報告をした。小中高等学校では、どの視点で授業を構成していくのか検討した。

・各中学校での実践記録、指導案の検討等「ジェンダーを意識した授業」の展開について意見交換をしてどのような授業展開に向けて研究するのかを考えた。

<第6回> 11月18日(水) 高校の研究協議会

・高等学校の家庭科授業で消費者教育を学ぶための金融教育を取り入れた授業の展開をした。

<第7回> 1月27日(水) 国際中等教育学校

・「ジェンダー視点を取り入れた授業の試み」の研究授業のデータを見ながら考察した。

<第8回> 2月24日(水) 世田谷中学校

・本年度の反省と次年度に向けての課題検討。

*その他

・臨時研究会は、小規模に随時行われ、研究報告・その後の方向性の確認などが話し合われた。

・教育実習事前指導： 総合教育科学系研究東号館

6月11日(木) 授業設計の方法1 学習指導案の立て方

6月25日(木) 授業設計の方法2 学習指導案の作成

7月2日(木) 授業設計の方法3 模擬授業と討議

7月9日(木) 授業設計の方法4 模擬授業と討議

2. 3. 成果と課題

本年度の附属学校研究会家庭科部会では、金融プロジェクト、ジェンダー教育、道徳教育など、多くの研究に取り組んできた。研究授業を積み重ね、データや記録映像から研究会を開催し、意見交換をするなど、研究を深めてきた。

各校が、一つのテーマで研究を進め、小中高等学校で取り組むための工夫を考え、実際に授業実践を行った。発達段階に応じた取り組みと、小中高等学校の連携は、頻繁に連絡を取り合うことで、良好なものとなっている。

家庭科部会のメンバーは、特別支援学校・小学校・中学校・中等教育学校・高等学校、各校種の教員が積極的に研究に関わっている。大学の協力も得ており、それぞれ連携をとる意識の共有化ができています。この理想的な体制がより継続できる環境を維持していきたいと切に願う。現在でも多忙を極めているが、人員削減や経費節約などで各教員個人の負担は増大している。教育実習についてもよりきめ細やかな指導が要求されている。受け入れることのできる教育実習生の人数には限りがあるが、一人の教育実習生に対する指導の重みは増してきていると思われる。各教員個人の努力によって研究を続けてきているが、今後も継続できるのだろうか。

家庭の機能がうまく働かなくなっている今日、教科としての家庭科を充実させていくことが重要であり、満足のいく成果を得るためには、各校の連携が不可欠であると信じる。今後も新しい視点で家庭科教育の研究をすすめるためにも、各附属の家庭科教員が協力し、実践を積み重ねていく。

(文責 国際中等教育学校 石津みどり)

IX. 英 語 科

1. はじめに

今年度の英語科部会では、昨年度に引き続き、日頃の授業において実践している活動や公開研究会などでの研究授業を録画や口頭発表などにより紹介し、それらをもとに意見交換や情報交換を行う授業研究を中心に活動を行った。各回の内容は以下のとおりである。

2. 活動報告

第1回 日時：4月22日（水） 16：00～ 場所：附属竹早中学校 テーマ：小学校英語活動①

平成20年度2月に附属小金井小学校で実施した公開研究会での英語活動（指導者：杉田理恵教諭）の録画を視聴し、学校の研究テーマや年間指導カリキュラムについての説明、その他質疑応答等を通して議論を行った。

第2回 日時：5月27日（水） 15：30～ 場所：附属小金井中学校 テーマ：小学校英語活動②

附属大泉小学校で平成21年1～2月に1年生を対象に実施された英語活動（指導者：石毛隆史教諭）が紹介された。「じゃんけん」を用いたゲームを通して英語活動が紹介され、指導者からの説明、質疑応答等を通して、議論を行った。

第3回 日時：10月28日（水） 15：30～ 場所：附属高等学校 テーマ：教育実習

今年度の教育実習や実習生の様子などについての情報交換を行った。10月に実習を行った学生の一部に、英語力に関して問題のある学生がいたという報告があり、どのように指導していくかということが今後の課題である。英語は実技教科であるため、英語運用力そのものに問題があっては、実習生本人また授業を受ける生徒のためにも宜しくないことであり、ある程度の英語力が保証された状態で実習に来られるよう、何らかの形で大学とも相談していくことを確認した。

第4回 日時：11月18日（水） 15：30～ 場所：附属世田谷中学校 テーマ：公開研究会

各学校で実施された公開研究会の内容や課題についての報告、また予定等について情報交換を行った。各校で公開研究会や学校行事等が重なってしまったため、相互に授業を参観できないこともあったので、今後も引き続き録画した授業を題材に授業研究を続けていくことを確認した。

第5回 日時：2月24日（水） 15：30～ 場所：附属国際中等教育学校 テーマ：授業研究（高校）

今年度11月の公開研究会で実施した研究授業の録画（授業者：高崎朋彦教諭、根本賢一教諭）を視聴の上、授業研究を行う予定である。

3. 次年度に向けて

過年度からの流れを受け、今年度も日頃各校で実践されている活動をもとに研究活動を行ってきたが、中学・高校のみならず小学校、国際中等学校、特別支援学校のあらゆる校種の教員が集まり、各校の授業の様子について情報交換をする貴重な機会となった。

来年度以降も、各学校の実践報告などをもとに情報交換などを行いながら、授業研究を中心に活動を行っていくことを現在検討している。

（文責：附属竹早中学校 松津 英恵）

X. 道 徳

1. 研究の概要

道徳部会研究テーマ

子どもの意識に根ざした道徳指導法の開発・改善

道徳部は未来に向け豊かに生きる子の育成を目指し、道徳指導内容・指導方法は妥当であるか等について検討する必要性を感じ、平成14年度から「子どもの意識に根ざした道徳指導内容の見直しに関する考察」をテーマとして研究を深めてきた。平成19・20年度では改訂学習指導要領の内容の具現化を目指し、子どもの意識調査及びその結果を受けての検証授業を中心に研究に取り組んできた。本年度は、学習指導要領の新指導内容（低学年「勤労」中学年「個性伸長」）に対応する資料開発及び指導方法の開発・改善に視点を当て研究に取り組んだ。道徳の時間の指導では、主に読み物資料を中心とする話し合い活動の後に道徳的価値に照らして自己を振り返る段階（展開後段）が設定されている。これによって「道徳的価値の自覚」に迫るとされる。この段階が一般化することによって確かに道徳授業は普及したが、「これがないと道徳の時間ではない」とする立場に固執すると形骸化は否めない。「子どもの意識に根ざす」という道徳部のスタンスから、「道徳的価値の自覚」を学習活動として改めて見直す必要を感じた。このことを基調として、各校の特色や子どもの実態を踏まえ、道徳資料・指導方法について、検証授業をもとに研究を進めることとした。今回で、特別支援学校に在籍する子どもに対する授業アプローチは3回を重ね研究成果を得てきている。また、本年度より本学に発足した総合的道徳教育プログラムによる「道徳教育教材開発プロジェクト」に参画し、「自己の生き方を考える道徳資料集」の開発に取り組んだ。

2. 本年度の研究の歩み

| 時 期 | 活 動 内 容 | 会 場 |
|-----|-------------------|--------|
| 4 月 | 年度研究テーマ・方法についての検討 | 小金井小学校 |
| 5 月 | 授業計画検討 | 小金井小学校 |
| 6 月 | 全体会 | 大 学 |
| 9 月 | 実践研究Ⅰ（1年生） | 世田谷小学校 |
| 10月 | 実践研究Ⅱ（4年生） | 大泉小学校 |
| 11月 | 実践研究Ⅲ（小学部1～3年生） | 特別支援学校 |
| 1 月 | 実践研究Ⅳ（5年生） | 小金井小学校 |
| 2 月 | 本年度研究のまとめ | 小金井小学校 |

（小金井小学校 和井内良樹）

3. 実践研究

（1）「働いたのしさ・役立つ喜び」1年（資料名「キツツキノしごと」自作）の実践

人間は本来、何かをすること自体を求め、たのしんだり、そのことに意味を付与したりすることができる存在である。このことから、「仕事」という行為そのもののたのしさを素直に感じられるこの時期に、「効果・作用が十分現れる。役に立つ。」という喜びを実感できるようにすることで、積極的に働き、役に立とうとする心を育てたいと考えた。そこで、「働いたのしさ・役立つ喜び」というテーマを掲げて教育活動を展開した。これまでの展開によって既に子どもたちは働くことが大好きであるが、今回の道徳授業では「働くことの意義」についての考えをさらに深められるような授業を目指した。授業の中では、「ありがとう」と言われたときの気持ちを考えた。タカオくんは、普段から何でも率先して活動する子である。ワークシートには、「この次もほくに任せて。ほくがずっといるから呼んでね。」と書いていた。この意欲的な発言の背景には、役に立つ喜び、そして、自分が貢献できた実感があったのだろう。次に、「みなさんは、『しごとをしてよかった』と思ったことがありますか。」と尋ねると、タカオくんは次のように発言した。「やってあげて嬉しいかなって

思ったことがあるよ。今、植物のお世話係をやってるんだけど、アサガオが『ありがとう』って喜んでくれたよ。だから花も咲いたのかなって思った。」子どもの感性の素晴らしさが改めて感じられた。心の中でこのように考えていたとはこの時初めて知った。そして、もしかしたらこのようなことが他の子どもたちにもあるのではないかと思い、「他のみなさんも同じようなこと思ったことがありますか。」と投げかけてみた。すると、何人かの子どもたちの手が拳がった。その中でエミコさんは、「うちのトマトに水やりをしたら『ありがとう』って言ってくれたように思ったよ。」と発言した。この発言を聞いたみんなは頷いたり、驚いたり、感心したりしていた。このように役立つ喜びを支える気持ちについての話は広がっていった。

子どもたちは日常の活動の中で様々なことを感じたり、考えたりしている。そして、その中にはこのような素晴らしい心の芽生えがある。特に1年生は、対象への愛着が深いほど、役立とうとする気持ちや、役に立ったときの喜びは大きくなる。「お相手さん活動」によって、「ありがとうパーティーをしよう」という意欲も、これまでに培ってきたお互いの思いの深まりがあればこそだと改めて感じている。

「テーマ」を設定することにより、道徳教育としての取り組みの方向性が明確になり、授業相互や他の教育活動との関連が生きる展開が可能となった。また、「しごと」の時間を通して、その「しごと」をやってみようことやそのわけ、人数調整などの問題を話し合ったことは、子どもの意識を知る上で大変参考になった。そして実際に作業している姿を重ね合わせて考えることで、子どもの意識がどのように持続あるいは変化をしているかを知ることができた。このような子ども理解を土台としてつくった道徳授業は正に子どもたちの考え合いを深めた。しかし、事前の子ども理解をもとにした授業の中でも、新たな子どもの意識を知ることもあった。改めて道徳授業の大切さとともに奥の深さも感じた。また、実際の展開には、子どもの意識の高まりや活動の進行状況など、様々な要素を考慮する必要がある。よりよい子どもの学びを支えていくためには、常なる子ども理解の深化と必要に応じて工夫・改善できる柔軟な展開力が必要であると感じた。子どもたち一人一人の個性が生きるよう、今後も自らを磨きよりよい教育活動が展開できるようにしていきたい。

(世田谷小学校 関 祐一)

(2) 「助け合う仲間」3年(資料名「むかしむかし、大むかしの子どもたち」自作)の実践

魅力的な資料の開発とその活用に視点を当てて授業を構成した。道徳の時間によく使用される生活文の資料は児童の実態に近いために、考えやすさもあるが、話のおもしろみにかける場合もある。そこで本時の資料は「同じ子どもの話だが、大昔の子どもの話」といった児童との時間的な距離をもたせた。提示する挿絵も教師が描いたので、興味をもって資料の世界に入り込むことができたようだ。話の内容にも引きつけられ、資料の範読の後に「このお話だれの作品?」「先生が考えました。」「ええっ!」「ウソだ!」のようなやりとりがあった。物語を純粋に楽しみながら学習できたことは成果の一つである。また、資料の終わり方、読後感もさわやかになるように工夫したので、友達とよりよくなかかわるよさについて、児童はよく考えられたようだった。資料を自作することには上記の成果もあったものの、課題も見られた。例えば登場人物の人間関係は、一見仲がよさそうに見えるが、よく考えると不自然な点があった。また、名前のインパクトが強すぎて、そちらに児童の意識がいくなど、児童の集中の妨げになることもあった。資料を作成する際は、学習する児童の視点からも、よく資料を見直し、推敲していく必要があることを再認識した。授業展開は、ねらいとする価値である友情について、前向きな意見が多くでた。友達と助け合って生活していくことのよさについては、感じられたようである。しかし、教師がそのようなプラスの発言を、「すてきなことだね。」と価値づけすることにより、マイナス面の意見がでなかったことは大きな課題として残った。「どうして～なの?」「なぜ友達って言えるの?」など、児童を揺さぶるような補助発問を取り入れ、(もし児童からでなかったら教師が伝える。)問題意識をもたせることを、今後は意識していきたい。問題意識については、資料範読の後に、「どうだった?」と問い掛け、児童一人一人が問題場面を考えるとといった展開もありえる。他にも「友達」という言葉の意味を児童が吟味していく授業展開や、時系列によらない構造的な板書、道徳ノートのダイナミックな活用(ワンパターンなノートの使用をしない)など、授業の手法についても協議会で話し合われた。また、資料についても発問する場所が後半に偏っている等、改善点が見えてきた。資料の自作は、教師の研究としても大きな勉強になった。本時の成果と課題を生かして、また挑戦してみたいテーマである。

(大泉小学校 野村 宏行)

(3) 「こぶとりじいさん～ともだちにやさしく～」特別支援学校小学部低学年（1～3年生）の実践

本授業「おはなしであそぼう」では、主に二つのねらいを設定している。ひとつは、想像力を広げることである。これまでの経験や知識から想像の世界を作り出すようなイメージする能力を意味する。いろいろな物語に触れ、役割を選び、演じることで力を身に付けていく。二つめは、コミュニケーション意欲を高めることである。他人からの働きかけを受容し、自分から表出することが求められるのがコミュニケーションである。相手との関係を築くためのスキルであると同時に、日常生活を豊かにするためにもコミュニケーション能力の育成は大切である。授業では、笑う・怒る表情や、上手下手な踊り、こぶをとられたりつけられる場面を擬音語を通して表現した。リズム感のある擬音語を台詞として使うことを通して、児童のイメージを膨らませ、やりとりの楽しみを味わえるようにした。また、上級生には、役割の違いを感じながら、笑顔の爺さんのやさしいことばを台詞にすることで、使ってみたいという気持ちを育むようにし、日常生活の中での使う力につなげようと試みた。

◎指導の流れ

- ①「始まりの歌」を聞く。学習の始まりを意識するようにした。
- ②絵本の表紙を見て題名を知る。前回の授業を思い出すようにした。このとき、ほっぺに触れながらこぶをイメージさせた。
- ③ロールプレイを見て物語をなぞる。踊りの音やこぶが取れる擬音語の面白さに気づくようにした。
- ④ロールプレイを演じる。（ペープサートを動かしそれぞれの役を演じる）。和太鼓に合わせて踊る場面では台詞カードを見ながら役割に応じた台詞を言うようにした。友達とのやりとりを意識できるよう出番と待つ番をつくるようにした。
- ⑤赤爺さんのやさしいことばに気づく。『なかないでいっしょにれんしゅうしよう』の台詞をゆっくりと読み、場面をイメージできるようにした。

（特別支援学校 滝澤千恵子）

(4) 「自分の夢に向かって」5年（資料名「心の中の歌声」自作）の実践

5年生の子どもに互いに夢や希望に向かって努力することの素晴らしさや、互いの夢や希望を認め合い、尊重し合う心を育てたいと考えた。中心発問では、「自分の夢」か「名声・お金」という対立構図の他に、夢の実現のためには一時的な妥協も必要という折衷案も予想していたが、子どもの反応としては思いの外「自分の夢」に偏った。資料の話の設定の問題もあるが、口パクで歌うことに対する子どもの抵抗感も大きいことが理由と思われる。授業者の切り返しによって、子どもの考えに対して強く揺さぶることはできなかったが、考えの根拠「本当の自分の夢に向かうこと」については迫ることができたと考えられる。自分を意識した形で自己を振り返る活動、【見つめる1】【見つめる2】を設定した。見つめる1では「心のノート」を参照させながら自分の将来の夢を想起させ、見つめる2では1での記述に対して夢の実現に向け具体的にアドバイスを記述させる自分へのメッセージの活動に取り組んだ。ほとんどの子どもが「自分の夢をあきらめるな」等と熱心且つ具体的なメッセージを記述していた。U香の「この夢のもっと先のことも考えていきたい」やW瑠の「次の世代の子どもたちへサッカーの楽しさを教えてあげよう」の記述からは、夢の実現までの個人的なプロセスの先にある共存性、つまり各人の夢の実現によって達成される人々相互の幸福といった内容が伺えた。夢は自己完結的なものではなく相互に関連していくという視点を確認できたことは一つの成果といえる。

（小金井小学校 和井内良樹）

4. 研究成果と課題

子どもの実態把握に基づいて道徳的価値への意識に根ざし資料開発・指導過程及び発問などの工夫を行った。中でも特別支援学校における子どもの思いや願いを生かす授業実践によってコミュニケーション意欲や能力を育む大切さを改めて認識できたことは大変意義深い。今後は子どもの意識に根ざした指導内容・方法の吟味、新資料の開発などを行っていきたい。

（小金井小学校 和井内良樹）

XI. 学 校 保 健

1. 研究主題

- 1-1. 学校保健部会としてのテーマ「保健室における心の健康問題への支援」
- 1-2. 平成21年度重点研究としてのテーマ「養護実習における大学と附属学校との連携」

2. 研究経過

- 2-1. 本研究は平成9年から継続研究しているものである。相談活動を分析する事例分析表の研究から、校内連携の阻害要因、早期の円滑な連携の方法について検討する中で、「気になる子どものチェックリスト」の作成に至った。今年度は昨年度の「気になる子どものチェックリスト」について、客観性の確立のためにその方法について検討すると共に、類似した「チェックリスト」を文献研究し、比較検討を行った。
- 2-2. 平成21年度重点研究として大学との共同研究が今年度より開始された。大学に養護教育課程が開講されてから3年、養護実習が始まったからである。本大学として、初めての養護実習なので、実習日誌から評価まで、すべて新しく、研究的視点を持って、作成する必要がある。そこで、まず先行研究を見るために文献研究・文献抄録の取り組みを進めた。また、養護実習を終えてから、本学附属校の養護教諭の養護実習への考えをまとめ、日本健康相談活動学会第6回学術集会で口頭発表を行った。

3. 附属合同研究会開催日時及び会場と内容

- 3-1. 第1回 4月22日(水) 15:00～ 会場：小金井幼稚園
研究内容：「チェックリスト」の客観性の確立のためにその方法について検討すると共に、類似した「チェックリスト」を文献研究していくことを話し合った。養護実習に関する研究を進めることを決めた。
- 3-2. 第2回 5月27日(水) 15:00～ 会場：小金井小学校
研究内容：大学から「養護実習」についての話し合いが持たれた。
- 3-3. 第3回 6月24日(水) 15:00～ 全体会 会場：芸術館
- 3-4. 第4回 9月16日(水) 15:00～ 地区部会 養護実習に関する文献抄録の作成について
- 3-5. 第5回 10月28日(水) 15:00～ 会場：小金井幼稚園 「チェックリスト」の客観性／養護実習
- 3-6. 第6回 11月18日(水) 15:00～ 地区部会 養護実習に関する文献抄録の作成のまとめ
- 3-7. 第7回 1月27日(水) 15:00～ 会場：小金井幼稚園 研究／実習について、学会発表について
- 3-8. 第8回 2月24日(水) 15:00～ 会場：大泉国際中等教育学校 研究について／実習について

4. 学会発表 日本健康相談活動学会第6回学術集会 平成22年2月20日(土)、21日(日)大宮ソニックシティ
演 題：「養護実習における学生と養護教諭の学びの検討」
内 容：本学の初めての養護実習について、養護教諭として、どのように指導研究したかをまとめ、口頭発表を行った。

5. 成果と課題

「チェックリスト」が流行っている昨今なので、よくその客観性を文献等で、再研究し、現場にあったものを再製作していきたい。今年度より、養護実習が初めて実施され、これからはこのテーマでの研究も重要なので、「心の健康」と「養護実習」の2方向の研究を継続し、深めていかなければならない。また、「新型インフルエンザ」などの感染症対策も各学校内での課題であり、「学校保健部会」は毎月1回では足りないぐらいの内容の多さとなってきている。

XII. 幼 児 教 育

1. 平成21年度研究テーマ

「大学4年間の総合的実習プログラムの開発」

～教育現場における学生の学習経験の整理と構造化～

2. 研究の目的と意義

平成21年度の研究では、附属幼稚園における学部1年次から4年次の学生の体験、学習の内容と方法を示すとともに、学生の学び方に質的な変化の見られる時期を明らかにする。くわえて、大学の幼児教育教室における授業の内容と方法を示し、学生の大学における学習と附属園における実践経験を有機的に関連づけた教員養成を充実させるうえでの課題を検討する。

3. 研究の経過

4月22日（水） 大学

今年度の研究内容の確認

5月27日（水） 大学

学生の経験内容確認

学生の経験内容の一覧表の作成方法の検討

5月29日（金） 保育検討会（小金井園舎）

6月11日（木） 公開保育検討会（小金井園舎）

6月24日（水） 附学研全体会

9月16日（水） 地区会 3年時教育実習における振り返り及び検討

10月28日（水） 小金井

学生のひとことカードからの学びの考察

学生の経験内容の表の検討

今後の進め方の確認

11月20日（金） 保育検討会（小金井園舎）

12月2日（水） 大学

研究の内容、成果の考察及びプロジェクト研究原稿分担

1月22日（金） 保育検討会（竹早園舎）

1月27日（水） 小金井

プロジェクト研究原稿確認

2月24日（水） 小金井

次年度へ向けて、成果と課題の確認

4. 研究の成果と課題

詳細は附属学校研究紀要、プロジェクト研究の項を参照。

XIII. 学 習 評 価

1. はじめに

本部会では、今年度の研究テーマを「心理検査等のテストバッテリーの使用法とその評価法、および、テスト結果の学習等における有効な利用について」とし、昨年引き続き「WISC-Ⅲ」「DNキヤス」等のテストバッテリーについての研修を行ってきた。4月以降の研究の経過は以下のようなものである。

- 4月22日 今年度の研究テーマの設定と研究計画
- 5月27日 いろいろなテストバッテリーの概要
- 6月24日 WISC-Ⅲについて
- 9月16日 テスト結果の評価についての研修
- 10月28日 DN-CASについて
- 11月18日 テスト結果の評価と学習への利用について
- 1月27日 WISC-Ⅲのテストの研修
- 2月24日 1月のテスト結果の評価と報告書の要点、研究のまとめ

2. 研究の成果

2. 1. テーマ『WISC-Ⅲを使った生徒の評価と移行支援』

2. 1. 1. はじめに

本部会では、これまでテストバッテリーとその評価について研修を重ねてきたが、今年度は実際の学習等へテスト結果をいかに反映させるかが課題であった。4月以降再度テストバッテリーについての研修を行い、その結果の評価について確認し、評価の学習への利用を検討してきた。その中で2つの課題が高等部から提案された。ひとつは評価結果をいかに現実の学習に具体的に反映させるかであり、もう一つはその結果・評価をいかに次のステップにつなげていけるか、すなわち必要な内容をどのように卒業後に生徒に関わる関係者に伝えていくかということであった。部会ではそのほかにもいろいろな視点から意見が出されたが、今年度は上記の高等部からの課題に着目することとし、比較的评价がわかりやすい、ある意味でアンバランスさのある生徒を対象にWISC-Ⅲを行い、その結果を第三者、すなわち卒業後に関わる進路先により有効に伝える工夫について検討することとした。

2. 1. 2. 対象生徒の実態

高等部3年生の男子生徒である。身辺自立は概ねできており、どの学習場面でも意欲的に学習に取り組むことができる。ただし、手指の巧緻性などの面で苦手意識があり、そのことへの注意や叱責に対し、過度に意識し作業速度が落ちることがある。

卒後は企業就労を希望しているが、希望する企業で仕事をする際に仕事の手順を覚えること、細かな作業を教えられたとおりに遂行することに課題があると指摘されている。同企業で繰り返し仕事を体験する中で徐々に手順等も覚えており、企業・学校ともにこの先も仕事面での成長が見られるのではないかと期待している。

2. 1. 3. 検査結果の概要

検査は、終始良好に行えた。知能指数等の換算は、まず対象年齢の上限で評価したが、下位項目の評価点が7項目において1であったので、個人内差の検討は、各素点のテスト年齢から相当年齢を仮定することにし

た。相当年齢を7歳2月に仮定して評価点を比較したところ以下の特徴が判った。

- 1) 相当年齢による評価点を言語性と動作性で比較すると、言語性検査の方が明らかに高かった。
- 2) 個人内の平均に比してある程度強い値を示したのは、「類似」と「単語」、「絵画完成」と「符号」の課題であったことから、抽象的な概念を含む言語水準が比較的高く、視覚的記憶が長期も短期とも比較的良好であることが推測された。
- 3) 明らかに弱い値を示したのは、言語性の項目では「算数」課題で、動作性の項目では「積木模様」と「記号」課題であった。それぞれ、計算力や、全体を部分に分解する力と視覚的に探索する速さが弱いことを示していると思われる。

以上のことから、本生徒は、言語が比較的強く、計算力が弱い。時間的な順序などの認識があまり高くないので行動の計画や結果を予測したりすることに弱い面があるかもしれない。その場合の支援策としては、比較的強い言葉を介して意味づけたり論理立てたりする方法が考えられる。計算や文字を書くことが苦手であるが、指示に従う力あるいは簡単な事務的処理の速さや正確さには強いものがあるので、さらに、視覚的記憶（長期も短期も）の強さを活かした補助があれば、覚えた仕事をてきぱきとやり続けることが期待できることが分かった。

2. 1. 4. 結果からの考察

現段階で、検査結果の詳細な評価はできないが、前節の概要より対象生徒の手指の巧緻性の課題については、明らかな改善点を見いだすことは難しかった。しかし、「言語性の優位さ」ならびに「指示遵守」や「視覚的記憶の強さ」といった検査結果から仕事場面における指示理解もそれを助ける手順表などのマニュアルが有ることで現在あげられている課題を乗り越えていける可能性が分かった。

2. 1. 5. まとめ

これまでみてきたように、通常の学校生活の中でみられる本生徒の実態をWISC-Ⅲの検査でおおむね確認することができた。さらにこの検査結果を詳細に評価していくことで本生徒の仕事を覚えるまでの独自性と課題、またその対応法もはっきりしてくるものと思われる。今後の部会で詳細な評価をすると共に、さらに就労先である企業に本生徒を今後指導（仕事上の）していく上での有効な方法や注意点などを伝えていくための効果的な評価連絡フォーマットなどを検討していく予定である。

XV. 書 写・書 道

1. 研究主題

附属学校研究会プロジェクト研究

有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発 —教育実習と事前事後指導を中心として—

2. 研究の目的と意義

教育実習生を受け入れる立場から見ると、学生は不安や焦りを大きく抱いているものの、それを解決する手だてを明確には持ち合わせてはいない。大学では、内容学や教科教育など考えられたカリキュラムが組み立てられているはずだが、その成果が教育実習において効果的に機能しているかという疑問を感じることもある。そこで、書写書道という科目や領域の特色を踏まえての教員養成のあり方を再考することが必要だと考えた。

本研究では、3年次の基礎実習を教員養成の核と位置づけ、その事前事後指導をどう改善したらより充実した基礎実習が行えるかを検討した。漠然とした不安を、何をするかで解消していくことができるのかを見出すことは、よりよい書写書道教員を養成していくという観点からも意義深いと考える。

3. 研究の実際

まず、書写書道教員にとって、どのような素養や知識、能力が必要なのかを基本に立ち返って検討した。特に、理論と実技の関連と融合、書写書道教員にとっての教科指導の専門性などに着目した。また、質問紙を活用した教育実習生の現状を検証し、検討・考察を加えた。また、事後レポートを読み解くことで、事前指導の改善につなげることを意図した。

- 4月 研究の方向性の検討
- 5月 事前指導の内容検討、授業実践
- 6月 授業実践
- 7月 質問紙を活用した現状把握 検討・考察
- 8月 学習指導案の作成と改善の指導
- 9月～10月 基礎実習
- 10月 事後レポート
- 11月 事後レポートの内容の検討
- 12月～1月 研究のまとめ
- 2月～3月 今後の方向性の検討

4. 研究の成果と今後

事前事後指導を改善していく方向性がいくつか見出すことができた。それらを踏まえ、次年度の事前事後指導の授業計画を再検討し、内容改善を図っていく。そして、アンケート調査等を同様に行い、比較検討することで改善の成果を検証していきたい。そうしていけば、よりよい書写書道の教員養成に寄与していけるものと考えられる。

(附属高等学校 荒井 一浩)

XV. 教育と福祉

1. 研究テーマ

「特別支援学校幼児・児童の地域資源利用について」事例検討報告

2. はじめに

今年度の教育と福祉部会では「特別支援学校幼児・児童の地域資源利用について」をテーマとし、本校の幼児・児童の居住地域での様々な資源の利用希望・状況について事例検討することとした。本校は学区域が広く東京都と埼玉県に跨り、13の区市から子ども達が通学している。最年少の幼稚部4歳児も公共の交通機関を利用し保護者とともに通学している。平日の日中を地域から離れて生活しているため、地域の資源についての情報を得る機会が少なく放課後や休日に幼児・児童が遊びに行く場所が限られる傾向にある。そこで、本校教員は幼児・児童・家族のニーズに応じた地域支援の利用が円滑にできるように、保護者とともに個別の教育支援計画を作成している。

2009年（平成21年）3月に示された特別支援学校の学習指導要領の総則にも、長期的な視点での家庭および地域や関係機関との連携を図るために個別の教育支援計画を作成することが明記されている。本校ではすでにそれらと同じ視点に立った個別教育計画の作成を試み、子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援のための仕組みを築いてきた。さらに、2005年度（平成17年度）には個別の教育支援計画や個別の指導計画の役割を備えた「総合支援シート（Aシート）」と「教育支援シート（Bシート）」からなる書式改訂を行った。

幼児・保護者のニーズから地域資源の利用希望を把握をし、その利用希望を叶えるための計画を立案されたものが総合支援シートである。今回は平成17年度～平成20年度に作成された4歳児学年の総合支援シート12枚を対象とした。総合支援シートを分析し、保護者と幼児がどのような地域資源の利用を望んでいるのかを部員で確認をした。次に、就学前から就学後にかけて、地域の各機関との連絡、調整の後に地域資源の利用がどのようになされたのか、保護者への聞き取り調査から個別に検討した。

3. 研究の成果

（1）就学後に利用したい地域の資源について

平成17年度～平成20年度に作成された4歳児学年の総合支援シート12名分を分析した。

本人・家族のニーズに基づく目標は21程挙げられている。21の内容は以下の通りである。

4歳児学年の本人・家族（12家族）の小学部低学年地域資源の利用についての希望 表1

| | |
|---|----|
| 1. 地域の学童保育に通わせ、地域の同年代の子どもたちと放課後を過ごさせたい。 | 6名 |
| 2. スイミングや音楽教室などの趣味の活動に参加させたい。 | 5名 |
| 3. 緊急の場合を考え、地域のサポートを利用できるような準備や体験をさせたい。 | 5名 |
| 4. 地域の障害児のための放課後クラブに通わせ、地域の子どものたちと放課後を過ごさせたい。 | 3名 |
| 5. 地域の医療機関（歯科）に通えるようにさせたい。 | 2名 |

表1のように、就学後利用したい地域の資源として一番多くあがったのは、居住地域の学童保育所であった。以下、スイミング・音楽教室等の趣味の活動ができるクラブ、緊急の場合を想定した短期入所やデイケア施設、地域の障害児のための放課後クラブ、地域の医療機関（特に歯科）であった。希望が一番多かった地域

の学童保育の利用について就学後の利用状況と利用のための課題等を事例から検討した。

(2) 地域の学童保育所の利用状況（事例検討）について

地域の学童保育所の利用を希望した6名のうち現在実際に通所している児童は4名。1名は家庭の事情により現在は入所希望をしていない。残り1名は来年度の利用を希望しており申請中である。以下、学童保育所に現在通所している児童の保護者の聞き取り調査から各事例の経過をまとめた。

【事例A3年】 希望していた居住地の小中学校区の学童保育所に1年生から通所している。

Aはこの学童保育所に入所するまで地域の施設を利用したことがなかったが、保護者自身がこの学区の出身であることもあって地域資源の情報は以前から得ていた。就学前にこの学童保育の指導員の方がA児の実態把握のため来校されたことをきっかけに、本校の関係者と学童保育所の指導員の方と情報交換を継続し現在に至っている。

【事例B3年】 希望していた居住地の小中学校区の学童保育所に1年生から通所している。Bは3歳児学年の1年間地域の公立のX保育園に在籍していた。4歳児から本校幼稚部に入学したが、週に1回は居住地交流ということでX保育園に登園していた。顔なじみのX保育園の同級生の数名が同じ学童保育所に入所した。また、Bの姉も同じ学童保育所に入所している。地域での同年代の子どもたちとの関係を継続させたいという保護者の強い願い通りとなった。養護学校の児童がこの学童保育所に入所したのは初めてというケースとなった。就学前に地元の就学相談を受けその結果を含めてBの実態を入所担当課に伝えたり、就労要件を整えたりするなど保護者はかなりの準備をし、希望通りの入所にこぎつけた。Aシートを4歳児学年の最後に作成したことで、入所のための準備が必要であるという心構えができたと言った。

【事例C2年】 Cの地域では、各学童保育所に障害児の定員枠があり、すでに定員がいっぱいの場合には希望の学童保育所には入所できないシステムになっていた。Cは1年間入所を待ち、2年生ですでに兄が通っていた学童保育所に入所することができた。入所を待っている間、兄が通う学童保育の行事に積極的にCも参加したことで、翌年、Cもスムーズに学童保育所に慣れることができ、また学童保育の子どもたちもCと顔なじみになっていたため暖かく迎え入れてもらえたと保護者は語っている。

【事例D1年】 Dは本校幼稚部入学前より地域の保育園に入所しており、入学後も保育園での交流も続いていた。Dは保育園の同級生の多くが通う学童保育クラブへ入所することができた。

居住する地域により、比較的障害の重い特別支援学校の児童が入所できない場合や受け入れに定員がある場合、保護者の就労の要件がある場合などかなり違いがある。入所した4名の保護者はいずれも入所にあたってかなり準備を必要とすると語っていた。4歳児学年最後の3月にAシートを作成するため、就学後の子どもの生活をいろいろ考えることがその準備のスタートになったとようだと語る保護者もいた。Aシート作成時期は適当であるように思われた。

4. まとめ

今後も引き続き事例を追っていきたい。

XVI. 生活科・総合的な学習の時間

1. 研究テーマについて

昨年度、新指導要領が公示され、生活科や総合的な学習の時間を取り巻く状況も大きく変わった。生活科は教科目標及び内容も新たに付け加わり、生活科に寄せられる期待と課題もこれまで以上に大きくなった。また、総合的な学習の時間は、これまで週当たり3時間の配当だったものが2時間となった。また、これまでは総則の中での扱いであったものが、学習指導要領の解説も出され、ねらいや内容、育てたい力について明示されるようになった。このことを受けて、今年度は、生活科や総合のカリキュラムの見直し作業を具体的に進めながら、各校の特色を明らかにし、その特色を生かしたカリキュラム編成へと取り組んできた。そのため、附合研においても、その進捗状況を情報交換しながら、互いの特色をしかした視点から検討を進めることにした。なぜなら、そのような作業を通して、各校のよさやよりよいカリキュラムの有り様について深めることができると考えたからである。

また、総合的な学習の時間を通して、子どもにどのような活動や体験を保証し、どのような資質や能力を育てていきたいのかという問い直しがされている。「活動あって学びなし」という批判はいまだに耳に入ってくる。学習活動や学習過程のパターン化により、学習問題に向かってじっくりと考え、話し合い、教科の学習が生かされたり、自分の生き方を問い直すというような、総合の「総合性」が薄くなり、むしろ弊害も見え隠れしているのが現状である。そのためにも、活動内容の選択や吟味を通して、どのような力を育てたいのかを明らかにする必要がある。

そこで、今年度の研究テーマを「生活科・総合的な学習の課題を見据えたカリキュラム編成」とし、各校のカリキュラムについて情報交換や検討をし、部員の問題意識を互いに共有しながら授業研究・協議に取り組んだ。

2. 実践報告

2. 1. 世田谷小学校 八木実践 総合『1年生のお相手さんのために』（第6学年）

2. 1. 1. 課題のありか

自分の願いの実現に向けて意欲的に活動が続ける子どもを育てるために、一人一人の子どもの「思い」や「願い」を生かした「子どもとともにつくる」単元づくりが大切である。

1年生に対する6年生一人一人の「思い」を友達と交流させることで、より具体的な活動をイメージした「願い」へと変わる。その変容を促すための手立てを考えていく。

2. 1. 2. 授業展開の工夫

子ども一人一人の「思い」を交流させることで、「思い」が具体的な活動の方向や内容を示す「願い」となる。教師は、「思い」を交流させる場面を設定することと、子ども自身が自分の「思い」や「願い」を言語化できるように支援することが必要になる。「思い」や「願い」を言語化することは、自ら進んで交流場面へのぞめるようになったり、「願い」の言語化により自らの課題設定をうながすことになったりする。「思い」の交流は、互いを共感、共有し合い、安心して活動を進める原動力になる。また、「願い」の明確化は、自ら課題設定ができ、自ら決めた目標をもち活動を進めていく原動力となる。

具体的な手立て：付せんを使って自分が読み取ったお相手さんの気持ちを話し合いの場に出し合い、それを分類して整理することで自分の班はどのような会になると良いか（会をつくっていく際の『願い』）を具体的に考えていく。

| 子どもの活動 | 見取る姿(☆)と支援(◇) |
|---|--|
| ○ノートの記録(「行動」と「思い(予想)」)を付せんに整理し直す。 ↓ 班の話し合い(サークルトーク)で話し合う。 | ☆付せんで整理しようとしている。 ◇お相手さんの思いによりそったカードに価値付けする。 |
| ○班のお相手さんがどんな思いになってもらいたいかについて考える。 ↓ □班が引き出す1年生の思いを『合い言葉』にする。 | ☆自分以外のお相手さんの思いについても理解しようとしている。 ◇「行動」を根拠に考えることができるように促す。 ◇「合い言葉」が□班のお相手さんの思いを実現する「願い」になっていることを確認する。 T「班のお相手さん全員の思いが実現できる『合い言葉』になっていますか。」 |

2. 1. 3 成果と課題

『願い』として明確になることで、主体的に活動を進めていく姿が見られた。今後、話し合いの場において、付せんを使った様々な話し合いの方法について検討していくことで、総合学習だけでなく他教科領域においても活用できる学習方法を開発できると考える。

2. 2. 世田谷小学校 沼田実践 総合『人の役に立とう～ありがとうコレクターズかはじまる～』(第3学年)

2. 2. 1. 課題のありか

この活動に取り組ませた背景には、自分のやりたいことを優先するため、お手伝いを面倒くさいと感じてしまったり、その手伝いをする意味がわからず、嫌々お手伝いをしたりしているという子どもの実態があった。また、活動に取り組む際にも、自分中心で物事を捉える傾向が強いこの期の子どもの特性を考えると、自ら意欲的に活動に取り組む際に「自分が人の役に立つと思っていることを行えば人の役に立つ」と考えるのは当然のことであると思われる。しかしながら、自分の見方だけで活動に取り組んでいては、相手を思いやりながら人の役に立つ行動を選択できないのである。そこで、人の役に立つという本質である、他人も良い、そして自分も良いというWIN-WINの行動を選択して活動に取り組むことが出来なければ、人と人とのかかわりを深め、より良い生活を築くための生きる力の育成にはつながっていかないと考えた。

2. 2. 2. 授業展開の工夫

子どもたちが学びの質を高め、自ら意欲的に学び続けるためには、子どもたち自らが問の本質に迫ることが重要と考えた。そのために、まずは、子どもたちの意欲を高めるために、子どもたちの思いを生かして単元を開始する。十分に活動に取り組み、人とかかわる経験を積み上げたあとに振り返りを行い、活動の中で感じた問いや成功した経験、苦労した経験を共有させていく中で、子どもたち自らが新たな課題を発見し、次の活動に取り組めるようにした。また、このような活動を繰り返すことで、前回の活動経験を生かして新しい活動を企画したり、苦労したことを改善してもう一度活動することで、苦労したことを成功体験につなげることもできると考えた。

2. 2. 3. 成果と課題

活動を振り返ることで、子どもたちが自ら新しい課題を発見し、次の活動に生かす活動を繰り返すことで、子どもたちはさらに意欲的になり、課題を解決するために自分の経験と比べたり、相手の気持ちを予想しながら活動に取り組んだりすることができた。本単元では活動を三回繰り返すことができたが、さらに繰り返しの活動を行うことや、地域との交流活動を行うなど、活動の対象についての検討が今後の課題としてあげられる。

XVIII. 情報教育

1. はじめに

情報教育部会全体としては、昨年度まで行っていた各種学校での情報教育カリキュラムをもとに、各学校での実践例の教材を蓄積する作業を中心に行った。

大泉地区では、校舎の改築による新ネットワークシステムの構築2013年度より実施される新学習指導要領にあわせて国際中等教育学校の情報科におけるカリキュラムの再構築の検討をすすめた。本年報では大泉地区の新システムとカリキュラムの報告を中心におこなう。

2. 中等教育学校の新システム

旧大泉中学校と大泉校舎の改築により大泉地区ネットワークの中心であった大泉校舎サーバールームから新校舎の新サーバールームへの大規模な変更が行われた。新ネットワークの特徴をして2つの点が上げられる。

はじめに光ファiberによるネットワークの構築である。これまでは各校舎（中学校・高校）の各階にスイッチングハブまで光ケーブルで施設し、その先の各研究室や各教室にメタルケーブルでネットワークを組んでいた。新しいネットワークではサーバールームから全研究室、全教室に直接光ケーブルを施設することにした。これによりこれまではVLANを組むためにそれぞれの関連するハブのポートに設定する必要があったが、サーバールームで一括管理できるようになった。またネットワーク上の支障（ウイルスや機器の故障など）が出た際の問題箇所の発見や切り離しなどの対処が容易になった。

2 点目は、LDAPによるユーザ管理である。昨年度より改築が行われてい

るため大泉校舎のネットワークと大泉中学校のネットワークを今年度当初に統合し国際中等用のネットワーク（ISSNet）を稼働させた。ISSnetには、教育用ネットワーク・教員用ネットワーク・教務用ネットワーク・3つのネットワークと大学の事務用ネットワークの4つのネットワークの複合ネットワークである。これらの3種のネットワークIDをLDAPにより一元化して管理することが目的である。生徒・教職員の区別はもとより教職員の中でも分掌・学年ごとにアクセスの権限を管理することが可能になる。

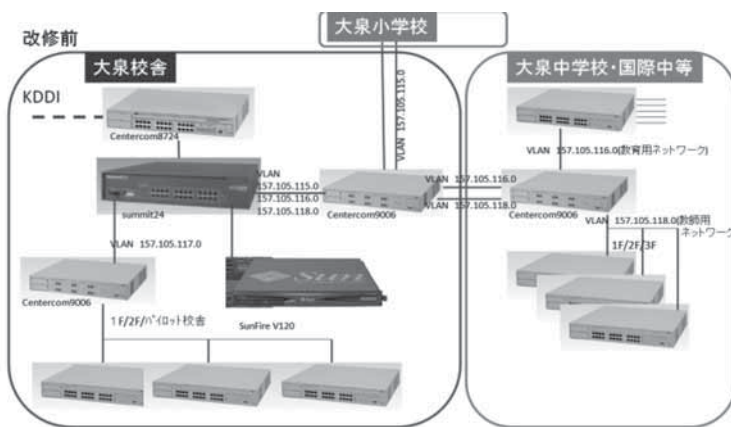


図1 大泉地区ネットワーク（改修前）

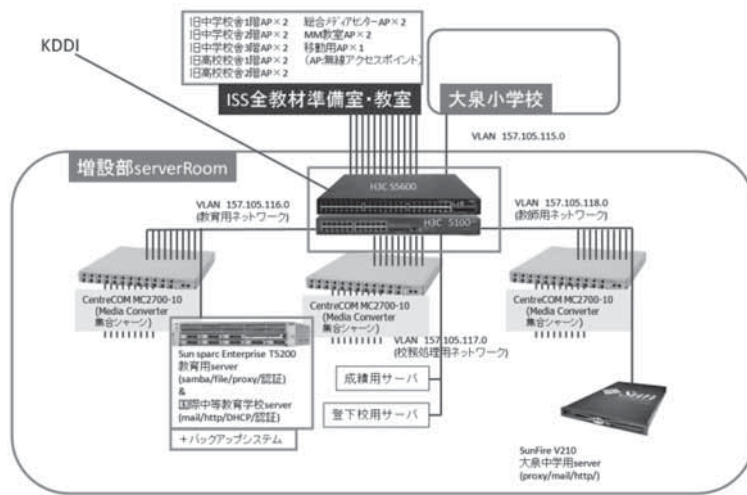


図2 大泉地区ネットワーク（完成予定）

3. 今年度の教科間連携

中等教育学校の1学年において情報を設置し今年で3年目となる。高等学校に設置される情報の授業を1学年にて開設する大きな目的は、「他教科におけるICTの活用を高める」「ネットワークを利用する上でのマナーとモラルの定着」の2つである。特に前者の目的は、本授業で情報リテラシーを身につけること、小学校6年生までにすでに差ができてきているコンピュータの利用経験の差を埋めることを達成目標としている。これらの目的・目標を達成するために教科間連携を行うことは大変有意義であると考え。それは、まず他教科の教材を扱いながら、情報の授業や情報科の教員が持つスキルを他の教員に利用する機会を与えることができる。また、コンピュータを使用することが主な作業ではなく、あくまでのコンピュータはツールとすることにより、現在の使用経験の差をあまり感じることなく、生徒がコンピュータを扱うことができる点である。

今年度の教科間連携下記の要領でおこなった

連携教科：美術

期 間：10月下旬～2月下旬（美術 2コマ/週、3コマ/週）

内 容：ISSの教科のCMを作成

方 法：各生徒に、教員が指定したCMをそれぞれ作成させた。はじめに美術の時間で、実際に放送されている様々なCMを用いてCMの工夫や意図、特徴などを学習させ、その後、絵コンテの作成を行わせた。そして情報と美術の授業を用いてビデオ撮影と編集をおこなわせた。

使用機材・ソフト：mp 4 toavi, Xacti (SANYO), Windows Movie Maker

4. 今年度のプレイマージョン情報

2008年度に美術との教科連携した際作成したピクトグラムの教材を用いて行った。この教材を用いた理由としては、中等学校1年生の情報は、国際教養教科群の1科目と設置されているので、どの国でも使用されているピクトグラムは教材として、それぞれの国の共通点や相違点を観察することができると考えたからである。授業の構成は下記のとおりである。

- ① 例としていくつかのピクトグラムをあげ、ピクトグラムの共通点や特徴を考える。
- ② ピクトグラムの収集。日常生活で意識することによりピクトグラムへの関心を高めることを目的とした。また、に旅行などで海外に行った際にも収集させ、特徴的なピクトグラムを見つけることができた。
- ③ 収集したピクトグラムの分析。
- ④ オリジナルピクトグラムの作成。

(文責 国際中等教育学校：河野 真也)